



---

# ソラヘノトビラ

---

近藤カコ

---

目の前で、初恋の人が死んだ。あれは十歳の頃だ

交通事故という、不幸と言えど不幸すぎる、あり  
 前の知見から見ると、深い一にもつ、柄し二んしに  
 知らなかったも、驚きと、たいたい驚き、生の私人なき、まははのいも、れそ、こけし、てのけとどな、初事れのか、め故どよとつ、てかそういた、恋られにう。し数さ思感い、た日ええ覚ま、相後テたでだ、手でレ。過に、私、を、ビ実ご、いまの感し何、とき中がて故、もかのまいか、簡目二つたわ、の手でレ。過に、私、を、ビ実ご、いまの感し何、とき中がて故、もかのまいか、簡目二つたわ、

その人は「  
 や六。一感を  
 ちたたケな  
 ついし二ん  
 ぶてをユそ  
 。れのミ、  
 た訪うコた  
 つをいのい  
 だ家ととて  
 男が際人つ  
 の我交うら  
 の初で女い  
 最ト男うて  
 のイるこえ  
 私バゆ「教  
 、ルわはで  
 はアいにり  
 の、人ノ  
 の師年の  
 の教一そ業  
 た庭約、授  
 家のか外  
 。でな課  
 高と人ない  
 だ一るて休

「  
 けで、クは関  
 の子頃てす  
 、のたしを  
 い男いそス  
 なたて。ク  
 めぐりあ  
 「方似ったッ  
 仕く通つセ  
 てよにだと  
 彼に園」折  
 な人稚人折  
 の幼稚時  
 気恋は「  
 か初とない  
 だの人妙会  
 何て二奇で  
 につのな上  
 のかそう屋  
 う、よに  
 言はらる毎  
 校生に、

低  
 職がくいらしきのを事一、言もなものしれそん  
 県分い悪わろつ世文は夕はとく当い女たけ、そ  
 。自汚、変う体い英にパてだ深妥合男つたしら  
 た、に相ろ。ない象考し生。がりのかしたか  
 っはくいもうだらな対思か校勢の関半なかつた  
 だに長たてとドなら察、ら高大うの後は度か。  
 師うはみっ割ルにだ観でやの他いとら味何なた  
 講言ト力な、一りく、かでそのと師か興はもつ  
 勤が一バににイ通でで愚ちもそ、教盤にのとか  
 常人力。今校フイクリがご分はた、中のもこな  
 非のすうは学い思んたどち自くいも代もうたが  
 のそ、言のはしのいんあはして係十たいじ方  
 道るくとう輩樂分黒がとを私もし関、つと感仕  
 書い太たいうも自い徒ほい。徹の体言際もて  
 かてはつといて、な生の違だ象にと大う交とく  
 確えんだ、うとがえなそ問ろ対者ト。そ女こし  
 は教ボ行たそら象消目、なこ察察イたは男たう  
 のをズ流い、た無に面とうと観観メつ私るしと  
 た生の大がもし象胸真うよる。そすだ、ゆをっ  
 い校服が中と有な生いじいたころのでわのう  
 て高制ア連今るいらのと同てつらクもりいも、  
 っに、へるのすな平チか、いかかるいか、てと

高校生はヒマで、退屈で、私はそのヒマをつぶす

れ屈金いだそわ会  
す退おと物、が員  
も、に長のて校委  
つず特員鳥ん学。  
一えど委二なにた  
の思れ、石会めつ。  
一はけし一徒たかた  
ヤと。るは生のなつ  
ジうたなての面らか  
レよつくつ校体すな  
、しだ良と高、とも  
もを倒はに立をこで  
つと面け私公のるど  
一こ、受、のいくほ  
のうは師て舎なてう  
恋い会教つ田がっ  
らう員。な。気回と  
なそ委いくるるが倒  
屈で。なないやの面  
退屋たもかてない。  
。りい間つれんしだ  
たがて手り知り忙け

顔を  
けい  
い  
は  
い  
を  
ない  
は  
い  
は  
い  
を  
ない  
は  
い

「今日は何午前と何の限ヤの分？」部か  
「委員一長、はかクラ中ス全のツ、便利屋  
ラステ、の誰しかのパシリにあっさた。彼女  
「今日は、帰りのサウでキニ返し仲崎と  
「彼は女は、そのう言う人だかりができて  
そ紛のれ、み、つ、と、も、な、く、い、つ、も、制、服、を、着、崩、す、

の彼りでけど性の荷  
ルでか場行とのるこなと  
ベ気ば交につ身い  
レ平力社校き中で  
低ら腕の高、の人  
のかだいなもそ一  
のそだたる女、も  
も。ぞべももて  
分たくるレ男てい  
自つなぞイ。つに  
。かががハウあ緒  
たなず子とろは一  
つきは女った性せ  
だでなたもい特う  
りは尚つらなほど  
知と高なたらのも  
見こがくつわうい  
顔むり近だ変いな  
のじ溜に。はとれ  
だなきんた私れ紛  
たに吹きも群は  
、れのぼてで。私

荷むいと  
つかい  
にわに  
袋か室  
巾着教  
のの時  
布製の  
がはこ  
し何私  
出つ、  
りいど  
取、ん  
を、と  
茶くほ  
のおぼ  
の後、  
限の、  
トル埃  
四の、  
トにつ

「委員一長、はかクラ中ス全のツ、便利屋  
「委員一長、はかクラ中ス全のツ、便利屋  
「委員一長、はかクラ中ス全のツ、便利屋  
「委員一長、はかクラ中ス全のツ、便利屋

教室を  
禁止に私  
が、私  
立場、  
立場所  
。の  
上そ。  
まわ  
か  
の  
棟  
の  
な  
屋  
いた

の禁を破って、更に見付かっただの  
は、ろ、一日、前入を、高入に、校だとい、入か、は忘れ  
の、と、し、

「竜彦…女がは、素簡、分れお、もな  
「竜彦…女がは、素簡、分れお、もな  
「竜彦…女がは、素簡、分れお、もな  
「竜彦…女がは、素簡、分れお、もな



、そ抜  
もがを  
、私煙  
長るら  
員いか  
委て鼻  
、い。  
く浮る  
なく  
く一て  
悪てち  
はい満  
けてに  
受ぎ中  
師すの  
教け口  
。ぎが  
たふい  
っが句  
かりの  
な周ト  
ず、ン

「時」「龍」

「「時」「龍」

「「時」「龍」

一年の時再会した古い知人は松前竜彦だけでなく  
名えだかれは程わ珍帰クいしぼ  
とき子いあにいいは校じにばで  
顔話のせ、れな、の学同緒し調  
、会こたてこれで折。一、口  
でなにつき。られい時たとくな  
りくとだてたけたにはい子しう  
かろこじしつっろ女てのらよ  
ばもな同やりを甘こ彼じ女の  
ちて妙がにたムのとに興のい供  
たい奇スろき一りなプにかて子  
人にだらこでレ通んイ話人れた  
なスタクとんク象こ夕間何さま  
うラ、時の運に印時な世が  
よクでの私を側の今うい女をこ  
いじ人年はつ校目。よな彼いと  
な同一一女や学たたいらでか、  
れ、の。彼お、見っなだ内っら  
容くいたににでのだらく校よし  
相な合いとのかそ子知で。ちか  
ともりてごいとほのを度いと  
私感知するな師女女と態しだ  
は帯のなあし容彼いこいらん供

「駅前」  
「駅前」

「駅前」

「駅前」

「駅前」

「駅前」

「駅前」

家は、学校から徒歩二十分ほどのところにあって  
目場も味のなのに  
の所今がだ、二は  
前をとなっひ、そ  
で歩なくたねはこ  
悲いって。く、に  
劇てて、私れ七飼  
が学は氣のたつ犬  
起校た付人娘年が  
こにだい生そ下一  
つ通のたはので匹  
てっ記らそ一、い  
、て憶その、小た  
もうでれ後を学の  
うてしが大し生だ  
七、か當きてだけ  
年だなたくいとれ  
がかり変た言ど  
経ら、前わ。う病  
つよ今なら両の氣  
け思なず親にで











。とどこや驚未。だ然  
たら私た、に、るん呆て  
いかななくさもすいはくた  
てだ怯考な外でがた私。れば  
い、卑ても意と気行た。よく飛  
驚てでんののこな？つになめ笑  
だく弱なもそいんか笑口か慰く  
たた脆とる、なそとはを、軽  
にいてこなはに。学畠と、何んく  
姿てしのに私うい大高こ、やる  
のしそ来気たそなのらなばじ明  
そ潰、将別いいも系がなれいに  
たをな、特で叶片洋なもばなう  
れ間沢て。ん、欠海いてんケよ  
ら時贅くう込もはは言っがワの  
せていさろいで当て思。るも  
見しなくだ思夢も本し、ななつ  
然かは倒いらいならかて、かかい  
突何で面なか遠んかめしうとは  
、もけはわ頭。そだ談。そ何畠  
くつわ私思とたに「冗た。「高  
ないう。は、っ私「高

のは無は私、  
たりてと。し  
つよんこた渡  
かうなたしに  
な言験い戻女  
ばと受聞に彼  
かめ学とトて  
浮慰大た一し  
が、いっノ出  
葉はてとをり  
言葉うを題取  
に言と績話を  
頭のは成とト  
。きでい、一  
。たっ度いてノ  
。返、う  
、一言  
朝ユウ  
のキそ  
日は  
明サ女  
彼

くだなやいはなと理て退いし、れそめ  
なのんらな私い能にい、さをもそ、や  
気るそうが、て本外驚てくり夢、いを  
何映にくのてし。以しい倒ふもがなの  
にに気どもつ着られ少て面の望いわる  
集う何ひな思執かそにき、子希なまえ  
真ふ、をきをてた。と生にいもはか考  
写なはれ好としれるこだのい来りでは  
のん私そ、こ大まいのたるは将もれ私  
ラどたはやなに生てそはいでもつそら  
ジはっ私のん界分きは私て外来うらか  
クにか。もそ世多生私、つ、未言ただ  
の目なたるとの、ら、くやらにだけ。  
上のいいれふこはかてなをか別まいた  
の女ててな。？由いくも員だ、とてつ  
机彼見いとうう理なな何委やに、きだ  
、を輝中ろろるくももスイ時ば生倒  
たはれと夢だだいたで望うが同れか面  
いうそらにんてにん展クの。けとは  
てジかきなるるき死なのなるた良何の。  
見クしらんいい生。もへしれっえでるた  
にうにきそてて。けで来潰さなさまえつ

だ不便だ  
をつをろつてつがる  
顔き空だつるすだ  
なひにいれなすがん  
やにそな忘くにすた  
い妙よらをしりにい  
は微をなのか通変て  
彦は彦くもぼの、つ  
竜私竜ななかそにな  
、なてやばてうに  
とみ嫌んいがてよ分  
う休機なのと立の気  
言昼不スそこを人な  
とのなレ、る定めや  
、日ントにい予わい  
いのそすちてせ捕に  
な次、とうつう元な  
き。りいるなどたん  
でたがないに。れあ  
がっ上して分だらて  
と言にりめ気のれし  
ここに上き眺ない逃う  
「たっひこー」  
「何？」  
壁にもし、  
を伸ばして、  
格好で、  
と彦は、  
深い穴のみ  
すぐにだ  
な

た。「あ、あなた、どうして生きてんの？」

「……は？」

すつとんきょうな声を出して、竜彦はその眉をしえなないけれど、それでも十分その空は深くて、落を伸ばしたまま、私は空を見つめ続けた。少しし下ろした。

「何だっか？」

「だっか？」  
「両腕がそこだけ、どうして生きてるのか、って、うばりつくよ、うにしくて、私は両腕を広げてそこにくは深い。落ちていく、果ては見えそうにない。竜彦はさ、面倒くさそうに答えた。

「知るか。そんなもん」  
「そうだな。ねえ」  
空を眺めながら、何だか屋上に上から押しつけらを返した。竜彦はそれにさらに気を悪くしたらした。

「さあ、どうおましては、なんで生きてるんだ？」

即答して、私は竜彦を見た。睨みつけるような視かかった。

「そんなこと、わかってたらどうして他人に聞くて聞いたんでしょ」

どうして生きるのか、なぜ生きているのか。それ問だった。一度は面倒だと思っ捨て放棄したはずの問だった。竜彦は眉をしかめたままそっぽを向いて、

「たかが十七の子供に、そんなこと考えさせたっで生かされてるかもわかってないんだから」

竜彦は何も言わなかつた。私もそのまま黙り込んでわなない顔を見つめ、肩透かしを食らった。や、なくとも、私飽出やれ、もていかと、私は勝手、柄、あも感、思、

「何か……バカみたい」  
「おま、えが、か？前、から、バカじゃん」

竜彦は私の言葉に、じろりと彼を睨めつけた。葉に眉をし、め、

「何だ、よ、自覚、してなかつたのか？」  
「……して、自覚、しど」

言っして、私は起き上がった。竜彦は、珍しく私に勝た笑みを浮かべて、重ねて私に問いかけて。

「何だ、よ、人、に、言、わ、れ、な、と、腹、が、立、つ、つ、か、か、？」  
「何、だ、よ、言、う、か、そ、ん、な、感、じ、だ、つ、た、多、分、私、は、自、

と、言、う、に、は、足、り、な、い、程、度、に、し、か、感、じ、て、い、な、か、つ、た、そ、と、わ、腹、が、立、つ、た、何、を、言、っ、つ、て、も、大、墓、穴、を、掘、る、だ、け、だ、つ、た、

「自覚、し、て、ん、だ、ろ、？、だ、つ、た、ら、バ、カ、で、も、ま、だ、マ、シ、な、

「何、を、し、か、め、た、ま、ま、私、は、問、い、返、す、。、竜、彦、は、意、地、悪、く、

一言言った。バカはい、バカだ、覚えとけ、バカキリコロ  
「胸くそ、み、無、理、矢、理、体、を、重、ね、て、い、る、と、言、う、の、限、に、ま、だ、人、い、た、に、だ、  
に、い、け、っ、こ、を、言、お、う、と、ど、う、も、い、や、忘、れ、の、で、ま、だ、か、ら、い、た、に、だ、

高校二年生最大のイベント、修学旅行の下準備係  
ウた、に、れ、ス、つ、  
「仲崎さんは中学の時、どこに行った？修学旅行  
「東京」...  
「東へ」...じゃ、三井たちと同じ学校？」

山下健一という隣のクラスの男子と知り合ったの  
く、そ、の、日、学、年、主、任、そ、の、他、に、捕、ま、っ、て、あ、れ、よ、あ、れ、し、め、  
人、た、と、仕、分、け、を、せ、ら、れ、た、。、捕、ま、の、日、狭、い、印、刷、室、に、押、し、込、め、  
「俺、ん、ト、コ、は、津、和、野、。、で、小、学、校、が、京、都、奈、良、。、東、  
彼、は、そ、う、言、っ、て、何、や、ら、思、い、を、巡、ら、せ、て、い、る、ら、し、か、  
、ろ、く、に、口、も、利、か、な、か、っ、た、。、変、に、な、れ、な、い、る、し、い、タ、は、を、  
く、さ、い、に、て、い、る、の、か、否、か、と、言、う、鹿、鹿、度、で、私、は、作、業、を、  
「仲崎さんと、カ、タ、イ、な、あ、も、っ、と、フ、レ、ン、ド、リ、ー、に、  
ひ、と、り、ご、と、に、と、う、と、う、退、屈、し、て、彼、は、困、っ、た、よ、う、  
目、を、上、げ、て、彼、を、一、瞥、し、て、や、っ、ぱ、り、何、も、言、わ、な、か、  
と、か、嫌、の、り、り、や、が、な、れ、。、思、う、口、打、う、算、私、を、よ、そ、に、彼、の、葉、は、続、い、  
機、が、あ、り、。、  
「噂、通、り、っ、て、言、う、か、た、...、...、想、像、以、上、の、生、真、面、目、さ、ん、  
「そ、し、て、、あ、た、ま、り、か、ね、た、私、は、思、わ、ず、お、そ、う、口、に、し、て、  
の、に、こ、た、の、時、の、私、は、調、子、が、ち、よ、っ、と、狂、っ、て、い、た、。、  
く、さ、せ、た、。、そ、し、て、直、後、勝、っ、た、と、ば、か、り、に、ニ、ヤ、リ、  
「そ、ん、だ、け、滑、ら、か、に、話、せ、れ、ば、十、分、だ、と、思、う、よ、う、  
そ、ん、な、風、に、言、っ、た、。、し、ま、っ、た、、と、思、っ、た、の、は、言、う、

それからしばらくの間、他に選ばれた修学旅行の  
席、す、の、八、つ、と、に、な、り、っ、た、。、そ、の、た、び、私、は、大、な、り、小、な、り、  
を、罵、倒、し、交、わ、り、。、彦、の、前、に、必、ず、山、下、の、話、を、し、た、。、  
「本、当、に、飽、き、も、せ、ず、毎、回、毎、回、。、あ、あ、も、う、腹、が、  
「飽、き、も、せ、ず、毎、回、毎、回、は、あ、る、意、味、私、も、同、じ、だ、っ、  
し、に、空、ば、か、り、眺、め、て、い、た、。、私、は、露、骨、す、ぎ、る、その、怠、

竜彦に食ってかかっていた。  
「本当に聞いてみる？ ああもう、どうしてあんたも  
いららする！」  
「だっさらい直接ヤツに交渉しろ。なで俺がお前  
「うら、勝手に使っつてやっつてやる！」  
「っつてゆーかし、そんやなに当たりたいならっその  
適当に準備して、私は勝手にストレナスの解消をし  
回る彼なもし人締めては、葉とむらぐせでやつもよ部  
言こをが良間体めれい全  
「その日は、腹が立っていら、いらすちの罵倒は止ん  
その口で塞いだりして、その後には、私たは彼から文句を聞  
分だけ八つしかめ私を睨み付けて、私を吐き捨てるよ  
「あいつに… … どうにかしてもらえよ。俺じゃな  
「… … バカ言わな彦から離れた。ばかばかしい。  
り替えようとしていた私に、竜彦は重ねて言った  
「山下だっ… … おまえに気があんど？ だったり  
気持ち良くなっ… … イライラが落ちついてすつきり  
はひどろが眉をしかめた。竜彦はみっとな、女  
「セックスクスっつてのは… … そういう相手とすること  
「… … バカじゃなはいの」  
呼吸もまだ整ってはいなかつた。体は余韻に震え  
のにそんな言葉は簡単にこぼれた。こいつはバカ  
いた。  
「何が」  
「あんたは私のイライラ解消の道具でしょ。そん  
？」  
脱いでしまったものや中途半端に体にくつついて  
めて竜彦を睨みつけた。竜彦は私にからふいと目を  
「俺は道具じゃない、人間だ」  
「だったら死ぬ気で抵抗すれば？ そしたらもう、  
「… … そうだな、考えとくよ」  
ぶっつきらぼうに、竜彦は言った。私は、そのまま黙  
言た、相葉かし、せてい  
「竜彦、あんな」  
「何だよ」

ふてくされてそっぽを向いたまま、竜彦は私に問  
この格好で彼に近付き、その側までやってくる  
かった。

「さっきの……本気で言ったの？」

「何が？」

「だから、さっきの……」

どうしてか私の中で、まさかそんな、という思い  
錯していた。竜彦は物憂げそうに私を一瞥した。

「山下と、ってヤツか？」

視線と変わらない物憂げな口調で彼は言った。私  
らないけれど、そのことに変に驚いて、無言で竜

、「おまえだって、思い通りにならないヤツと無理  
にしてくれる気のきいたヤツの方が、よっぽどい

そう言っただけで立ち上がり、座り込んだ私をおいてそ  
告げる予鈴は、その姿が完全に消えてから響いた  
り込んだまま、しばらく動かさなかった。何がシヨツ  
。ただ、気付いてみると訳のわからなさは悔しさ  
たく作った、ストレスを持って仕方なかつた。私は前  
けていた。

それから、その日はもう一度屋上に上がった。ど  
大詰めにあった修学旅行の下準備は、誰にも何も  
で屋上で空を見ながら一人過ごした。一人ではや  
こを思いながら。



こ。の私てにし。な  
とたい。ね耳うい  
のきたたかにどな  
こてカてえけ。、  
にれお立たやたら  
のさうをも、った  
なばい声のはだっ  
。飛ういるれ息い  
。放  
るはそ笑れそめし  
す次えはさたた陶  
ら野ま共られな鬱  
いなお男ささん。  
ら変。のに出そう  
いただり次き、ろ  
、ま理辺野吐なだ  
つ、無の上とうの  
立へやそ以、よう  
がこじてれ一るま  
腹そ長っこふけか  
。員言て。つに  
たい委をつたき私  
れな、と言い叩に

「悪いけど、今すごく眠いの。おいて口にする様  
「あ…しいけ…ご言、め葉、さは通常の社交におい  
刺々ししいにのっ擲くバベ  
明らしい私げい

別もでしスに來いお腫れも旅。そはな  
班でルまれ日出なもも腫つ学たし人細  
。あテかトのなきて誰のい修いか一些  
たあホやス次うでし。そははてしに、  
れ、。もで、よも発いて私長れ。間し  
疲くたにまてると爆しつも員らる時達  
てなううこしきこつらわで委頼す由に  
つがかるこをでういたされいで心自量  
使りな眠。消拭吸。つをそ夕ま感の容  
をまきでた解払をたかの、カにら前許  
経とで中つのを草いなもにおドが呂ろ  
神まものだそ積煙ではれとでイな風そ  
にくとスとに累、ん化腫こ目ガ我おろ  
計全こバこうるつ込変、な面ス。、そ  
余にいはいよざかめたに議真バうくは  
、のし間なのらおたし逆思。、ろなス  
れうら昼えもななを大。不皮りだはレ  
さ言光、吸つ常。スもた。面なえでト  
かと観れをい尋だレ色った鉄くゆ況ス  
聞だにら草でののト声かい上良ス状。  
をプもげ煙所間たスもなどのにレるた  
次一と妨く場日つ、きいほそ更トきい

ののただ  
程て、いてとずとつ。きもス全  
日つり聞しだとろ言だつ行一。  
の残たがう長ういかとす旅ケた  
間どつ員こ員言ろとも学とめ  
日ほ思職、委をい何い頭修本始  
三いて課でイ実がかいと三の三  
。いつ光人夕、人とぼるけ、ま  
たてな観一カはな、えすら本さ  
いっのに。お実んでまりだ二お。  
て言更市たで事ろ日しきスとりた  
えと今、け目のい初てつれくくえ  
考どとと続面こ、のしすト付っこ  
らんど、え真るを理にがス気ゆ聞  
がとなね考生い由生い分の、もが  
なほ、よでをで理。せ気こはら声  
めはがき人私んたたの。で草いら  
眺憶塔べーが及つぎそた日煙らか  
を記のるをもにかすもし一。い後  
色の重すと誰為な単嫌賛後の背  
景そ五名こ。行か簡機自、し中、  
の、な改なたる行は不画てにの時

「あ仲ま崎りに突？然、何か、け、しら、て、の、？、の、声、に、私、は、思、わ、ず、振、り



子皿そい  
拍灰めと  
たの始う  
っ用、ろ。  
返帯はだた  
り携主何っ  
振らの、言  
、か声せと  
は元、さる  
私手は化す  
た、顔変定  
ぎにたを固  
す時つ情に  
き同あ表下  
驚。にに足  
もだこかの  
にのそ微私  
りもにを  
まる…音線  
あな…物視  
。重…な  
いはラ妙き

「えっ」  
「今…の、何？」  
その時、よく、私は自分の手元から滑り落ちた  
でもばくばくと音をたてて動いて、心臓が、痛  
でた。貧血が始まり、目を白黒させている私を見て声の主  
の。貧血が始まり、目を白黒させている私を見て声の主  
「仲崎さん？」  
多分、何も、目を白黒させている私を見て声の主

けるよ、うに私を呼んだ。私はそろっぽろを向いて策  
開、そ、直んな、分、い、ろ、が、億、劫、で、面、倒、で、退、屈、で、  
た。今…の…何？」  
「……灰皿よ」  
ため息をつくように私は言った。そして、今まで

兆、も、そ、の、目、を、忘、れ、て、そ、れ、を、拾、い、上、げ、た。灰皿、と、何  
お、も、ら、隠、す、こ、と、な、く、そ、し、て、い、つ、も、の、よ、う、な、平、静、の  
か「いらいらしてたから吸ってたの、煙草」  
彼はそのことに突然過ぎて驚いている様子だった  
煙草とライター、それに蓋をした携帯灰皿を放り

。「貴方は何をしてるの？こんなところで」  
「……え？俺？」  
山下はそう言っ、打たれたように我に返った。  
驚くものなのだな、と余所事のようになり、ぺこりと、唐突に

「……何？」  
「謝ろうと」思っ。いい機会だから」  
今度私が驚く番だった。山下は顔を上げ、へへ  
言葉について説明を始めた。  
「バスの中で、俺仲崎さんに迷惑かけてただろ？  
こで謝っ、と、思っ」

私はその言葉に、自分でも気味が悪いほど驚いて  
ど見た人に嫌なものを感じさせない笑顔でそのま  
「仲崎さん、いつも黙って何か睨んでるみたいなら  
楽しい顔してもらおう、って思っ。全部逆効  
ごめん、と、言葉の後に付け加えて山下は頭を下  
の頭の後側を上から眺めていた。変な感じ、私は

「ベ……別に、謝ってもらおうことじゃ、ないと思  
気が付くと、私はそんなことを言い始めていた。  
気分だった。山下は顔を上げて、またあの困った  
ずらっぼく言っ。」「けど意外だ。仲崎さんでも、煙草なんか吸うん  
まともな反応なのだろうか。私は手にしていた巾  
に何気なく視線を落とす。無言のまま顔を上

「誰にも言わなれよ。だから安心して」  
「……何、それ」  
私は、煙草のことも他のことも、何だかもうどう  
のも、実際面倒だし、ばらされるならいっそそうなし  
隠れる、という面倒な手順も踏まずにいられるし











にやや驚き、しかし平然とした態度のまま彼女に  
「仲がいい、って… どうして？」  
「ほら、修学旅行の時、ホテルの屋上で何か話し  
修学旅行の時、ホテルの屋上で、と聞いた時、流  
まさかサヤコに見られていたとは思っていなかっ  
んで安堵するところになった。彼女も私の異変に気  
と手を振りながら、  
「あ、あのね、ちらっと見ただけだから。その…  
いからね。たまたま、お風呂の帰りに誰かいるな  
コで、その…」  
「どうやら、肝心のことは全く見ていなかったらし  
いつも通りの淡々とした口振りで答えた。  
「ああ、そのこと？ たまたま気分が悪くて、あの  
それだけよ」  
「あ… 何だ、そっか… そうなんだ」  
一人慌てふためいていたサヤコは私の答えに納得  
はそのまま首を傾げて、  
「… 何？ サヤコ」  
「うん… 変な誤解しちゃったから。ごめんなさ  
「でも？」  
サヤコは顔を上げ、えへへ、と少し笑った。そし  
だか言いにくいんだかわからない口調で言葉を紡  
「たっちゃん、いい人だから… キリコの彼氏が  
言葉の後、ごめん、と言っただけでサヤコは頭を下  
ら、年頃の女の子にしてはちよつと幼すぎる彼女で  
サヤコは私が黙っているのを見て怒っているとで  
。  
「ああ、だからね！ その… ほら、キリコとたっ  
よ？ キリコ、他の男子には目もくれないけど、時  
るし。それでみんなもそうなのか言っただけで  
何が言いたいのかは、それだけで何となく解った  
っていって、サヤコはそれに対して自分が勝手に心  
に言えれば、自分の信じている人間が勝手に顔な  
にそのまじり笑った。裏表も少く私を案じてく  
。にきついで裏表も少く私を案じてく  
。「ありがと、心配してくれて。でも、そういうの  
「え？ あ、そ、そうなんだ… そっかあ…」  
やや拍子抜けしたように言っただけで、サヤコはあ  
なるって聞いて、彼女の恥ずかしさも見ていて  
にこらがる。私は少し笑った。サヤコは「ごめん  
なを下げた。私は別に謝る必要はないよ、と言  
「みんなきつとそういう想像するもの。サヤコが  
」  
「そ… そう？」  
「そう。それが… わざわざ心配してくれて、あ  
重ねて自分が言った言葉に私は自分で少し驚い  
うな、けれど満足げな顔をして、  
「そんなの… お礼なんて言うほどのことじゃな  
ん。ちよつとはらはらしちゃったけど」  
そう言うのと、でもごめんね、と言っただけで、今  
表なくひたむきにいられた女の子もいる。何と  
ま別当の移動に私達は何事もなくかっかたかの  
を担当している教師に注意を受けた。サヤコは、

の思打  
こをを  
はとち  
私こづ  
、ない  
もんあ  
でそに  
。は話  
い私の  
なに女  
は意彼  
で不はた  
いで私つ  
嫌側らだ  
ど裏が覚  
れるな感  
けすいな  
る話思議  
あ会、思  
もにく不  
ろうなも  
こそもて

屋上で竜彦と会う機会がぐつと減った梅雨は一カ  
ゆに中今のたれの少の梅る「あ何のそい腹でたし  
「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し

「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し

「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し

「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し

「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し

「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し

「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し

「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し

「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し

「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し

「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し

「いお「  
「おイ  
「う彦  
「何う  
「ら彦  
「そ  
「あ  
「何  
「そ  
「い  
「腹  
「で  
「た  
「し



、のてだ。はにヨ  
でそっんか彦せシ  
ん、か呼と竜かか  
及やわで何、のだ  
にとく本かに具何  
為こなのとう道に  
行くとか、ろ、上  
のめ何何だだいで  
そわはかのるなれ  
。てのつなあやそ  
たいいい緒はじ。  
つつな。一感談た  
かみでたとり冗い  
ながうつれき。て  
がしそかいっだつ  
方、しなトすのな  
仕や楽しみはのたく  
てとがものいいな  
くこ彦てうら吐も  
しく竜といくと。  
樂着。思とたいよた  
もりたはスつなしつ

「震えめの後言か。く。嫌  
始音、来つ樂つつま  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「低くわののり泣顔  
「元で唇竜故あ倒み  
ずで、こ押し氣聞  
わんとそくし氣聞  
れをり氣筋

「あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「

「あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「

「あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「

「あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「  
「私あはり上がりてみ  
や見臍やし。」「

の抱擁だった。

果てまでたどり着いたその後、何も言わずにつしめ、耳元でバキリと私を呼んだ。私には奇妙に、め、れ、で、唇は、指先が、と、私、は、そ、れ、が、と、私、を、呼、ん、だ、っ、た、。、奇、妙、

コンドームを竜彦に買わせただけは一度もなかった。

は、乱々なツと別々、私には、良、く、私、な、そ、ぱ、ろ、良、く、な、に、ち、に、ツ、彦、し、ん、れ、は、も、時、持、ち、ん、竜、く、る、け、か、と、た、気、う、パ、な、て、た、の、り、っ、に、る、た、だ、し、見、た、言、変、れ、て、と、に、を、も、い、度、と、が、さ、捨、こ、で、何、顔、て、一、れ、咤、げ、た、い、の、つ、て、ぞ、ぞ、叱、投、つ、つ、て、生、な、つ、る、に、か、か、。、い、級、に、か、帰、て、彦、つ、な、た、は、同、り、だ、ろ、い、竜、い、け、つ、を、や、や、ま、そ、て、か、。、歩、言、れ、人、げ、い、ろ、れ、度、た、く、に、そ、知、投、も、が、し、も、て、う、ぼ、れ、か、か、と、彦、ん、で、め、は、ら、イ、人、の、こ、竜、じ、れ、始、の、き、ト、何、な、た、ん、そ、し、た、つ、の、で、い、

「大丈夫か?それ」  
「…何、と、さ、つ、ぶ、や、か、れ、た、言、葉、に、私、は、笑、っ、た、。、竜、

が仕でういな。で目てんよ、いえた顔かく込のし、さっなら、楽記重分じよ、たいら、気感、い、て、ま、遠、か、い、う、な、れ、れ、く、が、中、し、言、き、疲、ぼ、ら、も、体、が、と、で、し、こ、ぼ、か、。、す、人、得、少、が、し、も、た、が、別、納、。、み、ら、何、い、す、に、た、た、笑、か、。、て、は、さ、な、っ、つ、で、れ、も、し、に、ま、う、笑、か、け、そ、と、り、時、は、よ、し、な、だ、。、こ、き、た、と、い、少、ら、る、が、た、つ、い、時、な、は、べ、見、だ、い、す、つ、昼、ち、私、や、う、て、い、が、。、落、た、し、た、よ、つ、ら、あ、て、に、ま、を、つ、た、怒、く、い、腑、。、て、の、だ、つ、も、の、に、て、。、

「…あ、ん、こ、何、た、俺、も、か、笑、を、の、か、つ、見、ど、し、て、て、こ、こ、だ、つ、お、。、よ、て、か、そ、お、の、い、や、ま、。、ん、っ、え、お、だ、て、」  
「かよぶし?」  
「っ」として、る顔

いつの間にか私はいつものペースを取り戻して、いな、私、に、つ、い、て、黙、っ、て、歩、い、て、い、た、。、家、が、見、え、始、め、言、っ、て、勝、手、に、踵、を、返、し、し、た、の、に、

「仲崎」  
私は彼に呼び止められた。足を止めて振り返ると彦はふてくされたような怒ったような顔で、じっ

「何よ?」  
「…何、で、も、ね、え、よ、。、気、う、つ、け、て、帰、れ、よ、。、じ、ゃ、あ、残、何、だ、て、て、合、せ、何、の、行、ス、で、得、そ、に、ク、マ、納、れ、ど、セ、の、分、け、体、り、次、自、。、一、き、は、。、い、腰、と、。、送、く、て、だ、か、見、遅、れ、ん、い、を、ど、隠、込、な、中、ほ、と、つ、方、背、間、子、引、仕、の、時、の、に、は、そ、二、男、屋、れ、て、り、の、部、こ、っ、よ、生、の、ら、思、段、級、分、か、と、普、同、自、だ、。、と、

学校で進路希望調査なるものが行なわれたのは、つるでな端。に  
 末いでるない行「サヤコ、アンのケ一大トなんて書いかた？」祉関係もいつ  
 「一試験、期間、文中、系はのク短ラ私でこら、と出こ全、のたら、一しれ然生はは、な思恥  
 な別に、どな帰る道すだで別にしたいうか、先あ、生っ少に、な思恥るのてか  
 話たたほでなか勢「保育士……保育の園る、な、など子。はおん。つ話私思、供退思いな面と  
 「何気なく問いと、となど方っただ放とそ、んて別け、うとてそだよ、は入はんはなも合もも  
 らたばう主婦倒わこう連「……尼さんのって、忙しいとの話か、な、あ、い、る、サヤコをよ  
 はした。ういえ、ば、う、ちのクラスの、高、畠、ち、て、知、っ、て、る、よ  
 「え？……」あ、あ、知、つ、て、る、ア、ユ、ミ、ち、や、ん、で、し、よ  
 こ、唐、突、なく、私の、言、葉、を、サ、ヤ、コ、は、特、別、怪、し、み、も、せ、ず、ア  
 、聞、び、っ、て、高、畠、の、話、を、し、ち、や、つ、た、は、た、だ、笑、い、な、う、の、に、自、言、の、話、に  
 「あ、の、子、は、イ、ル、カ、と、か、ク、ジ、ラ、の、関、係、の、仕、事、に、就、き  
 「あ、サ、コ、は、驚、い、た、よ、う、に、ク、ラ、ス、も、違、え、ば、特、別、な、接、点、も、な  
 り、ぐ、。

「すごいでよね、アユミちゃん。昔からイルカとか  
もう決めてるんだね」  
その、憧れの混じったようなきらきらしたサヤコ  
コが、意外にも高畠のこるとを知らなっでいたこつとに驚いん  
ごていも変な、気分だわ。サヤコはにっこり笑って、  
「やっぱり働いて。さういこうとよね。私も、そ  
そん言っつて、空いてる左手でかわけい。私ガツツポ  
そはのサヤコを、見ているだいてる歩、う違、も  
もこの識な川。しヤニキ分を寂しヨッ  
の、大し

それから、瞬く間に期末テストがやってきて、来  
ブ活動と委員会が再開して、授業の時間が微妙に段放  
てを松前と彦と来て、へそ来て、誰か  
「… あんた… こんな時間に何してんの。珍し

「え？」  
「部活は？ サボリ？」  
そこで出て来た彦の顔に向かかって、私はいつものよ  
じて顔の別人は、本当に良く似た、ちよつとだけ間  
ですっかき勘違いして私に向かっ言葉返

「えーと… 彦彦の、事？」  
言われて、私はさうだ、とも、何だ、とも言い返  
う奇妙な疑問が胸にわいてきて、しばらくすると  
男の子は、困ったように笑って言った。

「僕は彦彦じゃないよ。えつと… こた、待ち  
言われて、私は思わずその顔を凝視した。しない  
出したら、だろ私の驚きの表情を見て、彼は困  
「あんまり似てないでしよ。それとも、似すぎ  
そこまですわね、私は自分が何をしている  
ろじろ見るなんて、すごく失礼なことをしている

「ごっ… ゴめん、ささい。てつきり… 」  
「あ、いよう、とそその場で、クス、とえらるし」  
彼は、さういよう、とそその場で、クス、とえらるし

「彦彦、よくここと来るの？ 僕なんかこの学校に  
「あ、… こえきどきしな、僕も休み、か… 」  
私は、変にどきどきした。彦彦と同じ顔の、だ  
がら曖昧に言葉を返した。彦彦と同じ顔の、だ  
えらその場で考えよう。彦彦と同じ顔の、だ

「そんなんだ… 休み。じゃあここで張ってたい  
それは同じ顔だと言っているのに、見たことのない  
言えが、自分的にも、松前彦彦の双子の弟、  
めを回し、たりの、でも、議、前、彦彦の、張、し、て、  
ちらに、付いたよ、何、事、から、私、を、見、て、そ、れ、

「もしコレと同じ顔のヤツが来たら、同じお面が  
」  
言われて、私は声を返すことができなかった。た  
少女マンガのシーンだったからキラキラがたくん

か場れてだでつ  
ののそい分ん思  
いそ、響氣るは  
しはとでいて私  
か私き中しし、  
お。驚体か恋で  
がたにはず「中  
何っ動き恥ての  
は去鼓どにえ乱  
彦きのきい揃混  
虎歩臟どらをの  
。ら心、く口そ、  
たかのずいがてる  
っ上分けなもし  
だ屋自とえ誰そ  
態てるく思、。似  
状しい全はらたか  
る残てはとないこ  
いいっ張分たてど  
て言鳴緊自いしに  
しととに、て乱人  
き、きのてし混の

十四歳の時、家庭教師のアルバイトでやってきた  
大しい入とけを知とせ今  
「と聞に」だ妹をこのと  
をうに校らだた実い初頃  
私よぎ高かむれ事い最の  
たけのいだ。離のてるあ  
い付し高倒るのこっぎて  
てき屈の面い年はだすし  
し焚退ルがてる親う早そ  
をを、ベ学つい両ど、。  
顔々くレ通わにと、らた  
な色なか「終家つがたい  
うかもとがに実きうべて  
よ何で何私だ、。よ比っ  
た、けは、むらたれに思  
つくわ親もでがつくの  
悟する両れげなだ嘆るう  
をらあ、そかし男悲いふ  
世たがをどおをるにでな  
りっ柄私れた師あ別女ん  
た思りたけっ教のも処そ。  
めと取っ。ま庭題でもる  
冷いかかたし家問。まにす

最初のセックスは、良くある女の子のパターンで  
たたすもど  
つってて、  
あ覚つ苦は  
とになもら  
つ頃に倒か  
もの死面て  
はそ必のめ  
抗、ぎそし  
抵そわばを  
なこぎえ味。  
的でわま、た  
実今をしかえ  
現。ととと考  
なたこれ、え  
的っな慣なさ  
質か倒、だ事  
物辛面だんい  
、もなたるな  
しのん。あら  
たるこたも下  
っ回はっ方う  
だき私か仕い

最初の男の人は私を好きだと行って、  
「とだらクなたこっ私たを  
なは、きかアらきうだかれ員  
んらう好だの知でいかつら委  
そかろに。いもがうらいいに  
、彼だ度たら誰手そ明、でき  
きたん程つくの相別てら子の  
とつもいかた外う特えたいし  
たまなななけ以い、見っい屈  
っしんわさこ分うどにかに退  
なてこ思出で自それ目な当、  
くつあとはいははけはい適く  
な帰まだ事ずと子うのて、な  
でに、嫌返まこのろなっくも。  
」舎はを、つい女だけ取なでた  
生田私のどっしののだともけっ  
先でたぶれけら五するりとわな  
「かつ及け、た、らえ回こたく  
もだかに。るっ四ふ増かるいな  
で何な事たあだ十いがしれてれ  
。かい睦来き」通言倒トまれわ  
たたもるがど人普ず面ク込ら誘  
れしてゆりき恋。わとタきめに

大人しくしてれば何事かは頭の上を通過して、  
に、いだを犯ん予た  
いりな誰スで及のっ  
悪あら。んにそか  
がもまらマしれ、な  
性でつか一楽そはえ  
りらてだオをだ私消  
よかつのフいま。し  
誰るたなパが、るも  
といいけにまらいが  
って剥だ目罪かてス  
ききんる手犯たしレ  
はでひい派、えりト  
私が、てと子覚たス  
、悟かっつるをっの  
き覚ん入よすと取あ  
とるなにち際こつる。  
たた皮中、交す乗いい  
っ当の、で助外をてな  
た、私匹中援を物きい  
当り。一の、目乗で違  
ちあにが世子羽、消に  
ぶで為女がるそり解る

「何んかな、最私近の、ス落ち着い、てのな」具であるところの竜  
うは内吸意「そとこ容っ外」「そふ彦」「竜、ゆが」  
「うは内吸意」「そとこ容っ外」「そふ彦」「竜、ゆが」  
「うは内吸意」「そとこ容っ外」「そふ彦」「竜、ゆが」  
「うは内吸意」「そとこ容っ外」「そふ彦」「竜、ゆが」

「おえ葉あ変し」少だ見そで近けと別と  
「おえ葉あ変し」少だ見そで近けと別と  
「おえ葉あ変し」少だ見そで近けと別と  
「おえ葉あ変し」少だ見そで近けと別と

「あ…訝「馬鹿して、私はず、とくすくす」と笑った。  
「あ…訝「馬鹿して、私はず、とくすくす」と笑った。  
「あ…訝「馬鹿して、私はず、とくすくす」と笑った。  
「あ…訝「馬鹿して、私はず、とくすくす」と笑った。

「珍しく機嫌よく家に帰ったのは、いつもと同じ夕  
「珍しく機嫌よく家に帰ったのは、いつもと同じ夕  
「珍しく機嫌よく家に帰ったのは、いつもと同じ夕  
「珍しく機嫌よく家に帰ったのは、いつもと同じ夕

「ハ関とねえはちい？」私に、玄ばだ期は思  
「ハ関とねえはちい？」私に、玄ばだ期は思  
「ハ関とねえはちい？」私に、玄ばだ期は思  
「ハ関とねえはちい？」私に、玄ばだ期は思

「ハ関とねえはちい？」私に、玄ばだ期は思  
「ハ関とねえはちい？」私に、玄ばだ期は思  
「ハ関とねえはちい？」私に、玄ばだ期は思  
「ハ関とねえはちい？」私に、玄ばだ期は思













座に。し  
に。ま  
り。よ  
な。れ  
と。崩  
の。始  
私。の  
な。も  
ん。う  
そ。よ  
、。り  
、。限  
ず。て  
わ。し  
言。い  
も。ら  
何。く  
く。ス  
ら。キ  
ば。で  
し。こ  
は。こ  
高。い  
一。と  
から  
「おま  
「…何  
ご。い  
て。い  
「虎彦  
「…何  
変。な  
い。た  
の。人  
不。感  
、。で  
「あ。い  
ぼ。そ  
を。か  
「も。し  
「…何  
変。な  
ぐ。ず  
つ。か  
「黙。つ  
「黙。つ  
竜彦は  
い。な  
を。待  
「な。あ  
「…何  
も。し  
ち。ら  
ほ。ど  
「俺。…  
「え。?  
「だ。つ  
い。う  
私。は  
か。見  
上。か  
「ら。し  
本。て  
か。?  
私。は  
当。の  
え。、  
の。は  
す。す

「おま  
「…何  
ご。い  
て。い  
「虎彦  
「…何  
変。な  
い。た  
の。人  
不。感  
、。で  
「あ。い  
ぼ。そ  
を。か  
「も。し  
「…何  
変。な  
ぐ。ず  
つ。か  
「黙。つ  
「黙。つ  
竜彦は  
い。な  
を。待  
「な。あ  
「…何  
も。し  
ち。ら  
ほ。ど  
「俺。…  
「え。?  
「だ。つ  
い。う  
私。は  
か。見  
上。か  
「ら。し  
本。て  
か。?  
私。は

「おま  
「…何  
ご。い  
て。い  
「虎彦  
「…何  
変。な  
い。た  
の。人  
不。感  
、。で  
「あ。い  
ぼ。そ  
を。か  
「も。し  
「…何  
変。な  
ぐ。ず  
つ。か  
「黙。つ  
「黙。つ  
竜彦は  
い。な  
を。待  
「な。あ  
「…何  
も。し  
ち。ら  
ほ。ど  
「俺。…  
「え。?  
「だ。つ  
い。う  
私。は  
か。見  
上。か  
「ら。し  
本。て  
か。?  
私。は

「おま  
「…何  
ご。い  
て。い  
「虎彦  
「…何  
変。な  
い。た  
の。人  
不。感  
、。で  
「あ。い  
ぼ。そ  
を。か  
「も。し  
「…何  
変。な  
ぐ。ず  
つ。か  
「黙。つ  
「黙。つ  
竜彦は  
い。な  
を。待  
「な。あ  
「…何  
も。し  
ち。ら  
ほ。ど  
「俺。…  
「え。?  
「だ。つ  
い。う  
私。は  
か。見  
上。か  
「ら。し  
本。て  
か。?  
私。は

「おま  
「…何  
ご。い  
て。い  
「虎彦  
「…何  
変。な  
い。た  
の。人  
不。感  
、。で  
「あ。い  
ぼ。そ  
を。か  
「も。し  
「…何  
変。な  
ぐ。ず  
つ。か  
「黙。つ  
「黙。つ  
竜彦は  
い。な  
を。待  
「な。あ  
「…何  
も。し  
ち。ら  
ほ。ど  
「俺。…  
「え。?  
「だ。つ  
い。う  
私。は  
か。見  
上。か  
「ら。し  
本。て  
か。?  
私。は

「おま  
「…何  
ご。い  
て。い  
「虎彦  
「…何  
変。な  
い。た  
の。人  
不。感  
、。で  
「あ。い  
ぼ。そ  
を。か  
「も。し  
「…何  
変。な  
ぐ。ず  
つ。か  
「黙。つ  
「黙。つ  
竜彦は  
い。な  
を。待  
「な。あ  
「…何  
も。し  
ち。ら  
ほ。ど  
「俺。…  
「え。?  
「だ。つ  
い。う  
私。は  
か。見  
上。か  
「ら。し  
本。て  
か。?  
私。は

「おま  
「…何  
ご。い  
て。い  
「虎彦  
「…何  
変。な  
い。た  
の。人  
不。感  
、。で  
「あ。い  
ぼ。そ  
を。か  
「も。し  
「…何  
変。な  
ぐ。ず  
つ。か  
「黙。つ  
「黙。つ  
竜彦は  
い。な  
を。待  
「な。あ  
「…何  
も。し  
ち。ら  
ほ。ど  
「俺。…  
「え。?  
「だ。つ  
い。う  
私。は  
か。見  
上。か  
「ら。し  
本。て  
か。?  
私。は

「おま  
「…何  
ご。い  
て。い  
「虎彦  
「…何  
変。な  
い。た  
の。人  
不。感  
、。で  
「あ。い  
ぼ。そ  
を。か  
「も。し  
「…何  
変。な  
ぐ。ず  
つ。か  
「黙。つ  
「黙。つ  
竜彦は  
い。な  
を。待  
「な。あ  
「…何  
も。し  
ち。ら  
ほ。ど  
「俺。…  
「え。?  
「だ。つ  
い。う  
私。は  
か。見  
上。か  
「ら。し  
本。て  
か。?  
私。は

たつらつて、ど  
ついでだしはれ  
かていじすれけ  
なつな感クそい  
は去もなッてな  
とをう変せしら  
こ上よもがそか  
な屋して彦。わ  
んてうと竜た、  
そつどか、つは  
然振、だはだ由  
全をや何とけ理  
。手ち。こだ。  
たでだたたとた  
つ中らつっこつ  
言背い送思うあ  
くはや見ても  
短彦りをめとで  
と竜怒彼改、実  
、まのてずだ事  
ろま前しえんい  
だの直とあた痛

その次の日から、半ドンだと言ふのに私は午後以  
 とのく来トて、私し以んく、のずられべな  
 るらいあいいてわしはうはし変忙彦いて  
 そ相が竜かつごは事。と会そ母仕たいも。  
 ご。近いハ度たでた最て一一し館れ、しタ来り  
 書くはをン以た凶に父生イ遇え、私。学は遭考  
 がをた小ツのし、たかつまヤあ少い許だまばはを  
 て幾子のえととって様彦彦こ知る態う虎の  
 は言いたそ前彼初恋の人目は前のトラッククに跳ねられて、今は  
 がこじなはそは人人し員かはし、気う同ら私、れ他一少委いか  
 困いにか、どこりはのイなう霧う頃たどれ（ば私んタはど  
 りそのつけかけかつ、ほ力でかよ、園だだどとやらてお分る  
 うら育子方方るはが「性が言か保双いいあれな会はなな  
 とだはが言言でそい度私うつ、のとらなな色。思一によに  
 目い私彼変変声たう。れるとたなどは。たういそいそけこ  
 見いられいま違て。な。抱たて彼そなれくしかくいをし  
 。似、。れこた張う多なのう。いはといし。つ緊ろりらもそ  
 てとるなもいまにだまかてが似彼みどかしの様のあわんの  
 くのてんのらの異なはくなくもなそえとなるもはと報た心な  
 とに考ほいいいる私こ情つ恋う何のてはせていてる。まによ  
 大体、わやっけ、しををて私、てがそ消適そ  
 恋愛と、誰拘そだ、い、も私、と、あてな。はけ。いるで手足葉し、そで解  
 ざり日と、に、感、ば、こ、こ、し、ら、く、彦、と、し、て、い、な、い、そ、  
 退屈はしたんし、伺。がる。露骨なよ、色最のそ  
 をううえ、をううえ、をううえ、をううえ、をううえ、をううえ、をううえ、  
 子ろほ思、とをたいス、とをたいス、とをたいス、とをたいス、とをたいス、とをたいス、  
 様のたに、何味つとり、と。るが失いは上合ば所もだ、分言あのも  
 そりのいう、。だいよと。いるじ話ででて都え場の間ものとい私  
 っあしのと惚好がて、い、く、に、結、任、一、な、か、当、し、そ、い、の、う、ば、な、が、当  
 取がもト、こ惚がちし、彦、な、な、感、局、せ、人、い、け、に、ま、の、う、瞬、と、そ、い、第、い、に  
 を要でツ、るの為持そ、く、し、恋、頻、日、り、た、が、く、は、し、た、ほ、あ、い、ま、だ、気、ば  
 嫌必寝り、れあ行気、ら、の、り、感、し、日、が、り、の、怒、い、手、近、彦、て、は、で、て、ん、倒、ら、れ  
 のす分は、わろそよ実、日、感、れ。当、え、ど、年。と、つ、あ、る、罵、聞、は、々、る、で  
 か束のけ、さ、ち、は、何、充、こ、こ、し、ら、く、彦、と、し、て、い、な、い、そ、  
 機る昼メ、らん、の、り、感、し、日、が、り、の、怒、い、手、近、彦、て、は、で、て、ん、倒、ら、れ  
 のす分は、わろそよ実、日、感、れ。当、え、ど、年。と、つ、あ、る、罵、聞、は、々、る、で  
 か束のけ、さ、ち、は、何、充、こ、こ、し、ら、く、彦、と、し、て、い、な、い、そ、

起こってしまった欲求は取まらず、仕方がないの  
を慰めた。いじつて感じゃ、そりうしまいで間はぼ  
れど、終にっつみる感とるや、ぱと股間手ははて  
す、こ寝をしくば。夜中だ。つた。

その次の日も、誰も来ないだろう屋上に、私は一  
ていて、別に何がでできるわけでもなしに上がっ  
毛だ、となっ。その日は夕方までとどき昼寝  
しな、夕暮れまで屋上で過ごし。竜彦やその  
またその次の日も、同じように昼時屋上に上がっ  
顔に柔和な笑みを浮かべて、仲崎さん、と私を見

。「何、してるの？」  
「え、僕？ 竜彦が、気になるんなら行ってみろよ  
ここで二人で、昼寝してるんだってね」  
彼は、私たちが昼寝以外の何ごとをしているとは  
いでおいで、とその手で私を招き寄せた。私は遠  
の言葉には、何も言返さなかつた。露骨に警戒し  
こたえ、不意に彼がこんなことを言うので、ち  
「仲崎さんて、近くで見ると美人だよ。まじめ  
いし」

「そ... そう？」  
「うん。それに、そういう人がこんなところで毎  
笑えるよ」

彼はそう言うのと、どこか女の子のように、ふふ、  
処していいのかわからなくて、少し戸惑いながら  
あ、と言っ。返ると、そんな私に向かっ  
「ごめんごめん。ほら、色々噂されてしょ。  
スでトツプ、とか。だから竜彦と仲がいいって聞  
つたより普通っぽくして」

「... 別に、特別変なつもりはないけど。それ  
私は、ちよつとだけ幻滅して。ぼんやりとし  
ますか、すかに彼に抱いていたのが、ちよつと恥  
で、と、自分で自分を評した。虎彦は腰に柔  
、うが、合つて、自分で感じる口調で、女は腰に  
は視線を反らさず、口をたじろぐ。結局、自分  
割り切ることにした。

「別に... 彼とは仲がいいわけじゃないわ。たま  
「あ、そうなんだ。へえ... そうなんだ」  
私が言葉を返すと、虎彦はそのまま、何かしゃ  
こら中にいるその他大勢と対して差のない、十代  
面がよほどいと思っ。突如虎彦は言っ  
「竜彦に聞いたんだけど... 保育園が一緒だった  
「ええ... そうよ」

「僕、ほとんど行っつてなかつたから... 覚えてな  
その言葉に、私は少しびっくりした。虎彦はさ  
な顔をして、それからいたずら小僧のように少し  
「別に、そんな... 私、双子だつたなんて、あ  
正直に言葉を返した。実際、高校に入って竜彦と  
が双子だったことや、虎彦も同じ保育園に通って

言はもはと彦 う比吸だいはは にべおめう唐 はもうだや突 、のととツに 弟には言で切 のなしつ、り ほらなてひ出 うなか。よし はいつ私んた。 赤くたたな。 ちら。ちこ やい喘はと ん体息そか のが持れら 頃弱ちか虎 ちかでら彦 よっあ、と ったるとサ との弟りヤ しだをとコ たと案めが

「いつもここです……竜彦ってどんな風なの？」  
「どんかな、年貞操を奪って、以来好きに扱わせて  
不思議な彼の問いかけに、そう問い返していた。

「何か……変な感じなんだ。竜彦が僕の知らない  
って。高校入ったくらいから変に難しくもなって  
、と思つて」

私は何も言わずにいた。虎彦は困った笑みのまま  
茶化すように疲れたように、微妙なため息を吐き  
「変だよねえ、もう十七にもなるのに。僕ら二人  
十七年もつきあってるのに。今さら、干渉するっ

「そうかしら」  
私は、しらつとした顔でそう言つてやった。虎彦  
をして、私をまじまじと見つめていた。私はその  
いと思えるが、その思惑とはまったく逆のこさ  
まで言えるものだな、と意識のどこかで関心さえ

「お兄さん思いで、いいんじゃない？心配なんぞ  
「うんまあ…でも、気にしすぎじゃないかな？  
私に肯定されて、虎彦は少し驚いているようだっ  
驚いているだけではないでちよつと嬉しそうに聞

「家族思いなのはいいことよ。おろそかにしたり  
おかしいことじゃない？」  
「そ……そう？」

虎彦はそう言つたと、照れくさそうに笑つた。十七  
している姿は、格好がつかないしブラコンの上ホ  
おかしいと言つて、私は平気でそううそぶいた。  
。にころを知らないうちに、兄思いで。私はそ  
彼に言つた。

「彼とはここで会うだけで、特に話したりもしない  
の。期待に添えそうにないわね」  
「ああ、そんなこと」

虎彦はその言葉に、打たれたように我に返つた。  
とすると仮面のような、できすぎた笑みをその顔  
言つた。  
「気にしなくてもいいよ。そんなの、わからなく  
ら教えてほしいんだ。もしかしたら仲崎さんのほ  
かもしれないし」

言葉はちよつと奇妙だった。ひねつてあるのか、  
彦は人畜無害の笑みを、そんな私を見て少し崩し  
「ああ、変な勘繰りしてるとか、思ってるでしょ  
そうじゃなくても、この先は……ねえ？」

そう言つて、さつきとは違う種類の笑みを口元に  
こそんだろ。考えないくてもわかっただけ。私は一つた  
そんだろ。考えないくてもわかっただけ。私は一つた  
思つた。眺めは、根、分、つていける。違  
か、そ、な、い、と、願、つ、て、い、る、に、違  
。く、な、い、と、願、つ、て、い、る、に、違



く たげ 彼や中全  
た い、じ背が  
つ もれの情  
ま 言 てそ歳表  
は 」と し、七る  
と ねあ 対と十せ  
こ よな なるの見  
う だい 彦ていに  
いう ず 竜立思の  
う そま とを兄な  
そ？ つ声、顔  
は いて、顔  
と そつ きいてじ  
彼 …ま く笑つ同  
、 … 固 はつにに  
も 一と で作場ず  
何 あつ にくのせ  
も 、よ けしそも  
先 あち だら人張  
の 、は 私晴一緊。  
こ え彦 。素はもた  
「 虎 たと私きえ

それ から 数日 が 過ぎ た ある 日、 教室 では また 進路  
徒ぶにま場とそたられ後か  
生つのけるっ。っかけ、う  
、をうだすきだまだたてこ  
れ暇言しを、げし。っし向  
らてと少活はさてたかも、  
配っだ、生のなっつなで  
がや、と団うきなかも寝前  
表うで、集言でに良何昼手  
程ど目うがともとぼとしの  
日体回ろ性すにこれる少扉  
の 一 二 だ 女 ら る む げ れ て の  
ら 中 は の 身 暮 す 悩 の わ べ そ  
や 夏 査 る 独 で 消 た し 言 食 を  
と、調れはり解まにとをれ  
談は望入のかはで当か昼そ  
面私希らうばでと適るおど  
者。路たい女尼こをあ。れ  
三た進つと。もな屈かたけ  
にい。や寺たか変退何っ、  
でてたう尼っし、るにかは  
いっつどらだ。てい所な私  
つな思体た手いって場てた

ろ なんだん  
て っか。そん  
っ っ っ  
え っ っ  
ね っ っ  
ん っ っ  
わ っ っ  
て っ っ  
な っ っ  
ん っ っ  
も っ っ  
な っ っ  
と っ っ  
か っ っ  
あ っ っ  
か っ っ  
来 っ っ  
「 っ っ  
よ っ っ

鋼鉄の扉は重々しくきしんで、外に向かって開い  
陰ら  
日 傍  
と、そ  
むいと  
むいて  
りぽに  
とを気が  
回向付  
りぽに  
るっ訪  
ぐそ来  
へにの  
う私の  
こそう  
向嫌が  
の機た  
塊不いた  
なはて  
き彦は  
の大食  
の。を

「あ、来た。仲崎さん」  
私は、何事だろうと思って彼ら二人と、その周辺  
と私を見て、すぐにはまた視線を遠くへ投げた。虎  
げている。目は、目の前にわかつた。  
「… … おじやま、かしら」  
何となく、私は虎彦にそう訪ねていた。傍らで、  
虎彦はひとなつこい笑みを浮かべたまま、  
「ううん、そんなこないよ。待ってたんだ」  
「待って、た… …私を？」  
一体何がそんなに嬉しんだらう、というくらい  
私を手招きし、しながら更に言葉を紡いだ。  
「昨日仲崎さんのこと母さんに話したんだ。そし  
て弁当作ってくれて。ほら、竜彦も食べなよ、残  
「食えなくて… …俺あこの後出稽古だっつーの！  
何とかがしてくれ、と誰かに助けを求めんばかりの  
彦はまたたくまに怯まず、

「またそういう口利いて。母さんや婆ちゃんが嘆  
も全然ないし。そんなうじや、友達減っちゃうよ  
何となくお婆さんのような口調でそんな竜彦に言  
彦と、そのまんまどてい  
中身格好した。う  
「あ、仲崎さんも、食べて食べて… …って、もし

「… …一 応」る荷物と一 緒に持っ っ ていた、 つい さ っ  
 家 へ 持 ち 帰 る 荷 物 と 一 緒 に 持 っ て いた、 つ い さ っ  
 を 思 っ っ た。 竜 彦 は か す か に 視 線 を  
 「 ほ ら 見 る、 裂、 と 言 っ て け っ っ っ っ っ っ っ  
 鬱 陶 し さ に つ な ぶ や と 言 っ た。 虎 彦 は、 あ く なる よ ね、  
 い の 中 で こ の、 は と っ っ っ っ っ っ っ  
 「 で も こ の、 は と っ っ っ っ っ っ っ  
 「 で 相 伴 に 預 か っ っ っ っ っ っ っ  
 彦 の 困 っ た 顔 は 笑 顔 に 変 っ た。 彼 は 再 び そ の 顔 に  
 に 並 べ っ た。 彼 は 再 び そ の 顔 に  
 「 遠 慮 し っ て 言 っ っ っ っ っ っ っ  
 あ り が が と 後 も が 母 双 が べ い 続 は 中 は に キ、  
 。 の が し し。 食 奇 み そ 勸 れ 後 雑  
 。 彦 も、 が こ 人 よ な 浮 世 ら そ は 顔  
 。 の が し し。 食 奇 み そ 勸 れ 後 雑  
 。

「 言 え ば、 今 日 進 路 調 査 あ っ っ っ っ っ っ っ  
 そ う 言 っ て さ、 今 日 進 路 調 査 あ っ っ っ っ っ っ っ  
 う や っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 結 構 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 「 仲 さ 崎 さ ん は 高 校 出 見 た ら も、 つ ど か 具 っ っ っ っ っ っ っ  
 「 僕 は 文 系 の 大 学 生 ば っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 術 屋 と そ う 言 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 た 彼 彦 は 向 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 「 彦 彦 は っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 「 … … っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 ふ て く さ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 し た。 そ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 「 ど っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 て。 こ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 「 あ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 「 そ う そ、 最 初 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 た ん の だ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 男 の 兄 弟 と い っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 を 見 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 対 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 す っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 と っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 返 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
 と っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ



をルこ、向がそてこが  
り一、て日アはんそ顔  
怒ゴきい。ド手なはる  
。はとてたののる私あ  
た節たしい上私め、の  
い季いりて屋。やてと  
て。つやい、だでしこ  
れいりん着らん中がた  
きなどぼちかヨ途音見  
あれたし落てシ、閉は  
にしに少もし一て開に  
のも上はてくべいのこ  
もか屋私とら一てアそ  
うのは。ばタつドど  
いた私たにしスななれ  
とつられりてマにきけ  
間かかわぶめるる大。  
人なだ捕し始ゆぬにた  
、れ。えさてわる変っ  
いなたさひっついぬう思  
なにつにか思。でい直  
ら気か覚だといのと正

「...彦  
「...彦  
上こうはう  
そ  
命はらく  
懸私ため  
生、れう  
一でば、  
、いがて。  
顔を  
らなとしだ  
がしこくい  
なもう尽紡  
い  
い  
な  
驚  
げしいちを  
上隠う立葉  
見をこに言  
を中、こで  
空のてそ声  
、トしてた  
、見  
て一がしれ  
、見  
い力をす  
が、い顔か  
客、いな、  
先ても赤度  
にしで真一  
「...彦  
「...彦  
私

「...彦  
「...彦  
私  
そ  
よ  
し  
で  
彦  
で  
彦  
は  
、  
彼  
が  
そ  
覚  
て  
今  
行  
を  
た  
っ  
は  
っ  
、  
の  
彼  
っ  
や  
。  
で  
や  
て  
と  
で  
言  
て  
た  
う  
に  
な  
い  
ち  
為  
い  
く  
み  
柄  
彼  
の  
。  
難  
ま  
に  
し  
人  
い  
て  
し  
っ  
こ  
ろ  
に  
他  
勢  
っ  
を  
だ  
る  
よ  
う  
に  
な  
こ  
初  
う  
関  
ほ  
人  
奇  
た  
た  
思  
彼  
と  
は  
ち  
係  
ど  
、  
妙  
。  
だ  
わ  
は  
こ  
こ  
う  
の  
ま  
い  
」  
と  
と  
よ  
々  
ま  
な  
礼  
こ  
こ  
の  
私  
ず  
、  
そ  
じ  
「  
し  
た  
と  
ま  
来  
は  
ダ  
応  
に  
つ  
ら  
ぎ  
以  
私  
タ  
一  
め  
思  
ふ  
ひ  
手  
、  
で  
た  
か  
ら  
に  
相  
ら  
て  
場  
の  
何  
ふ  
前  
の  
か  
え  
の  
楽  
に  
は  
の  
前  
れ  
ま  
そ  
快  
他  
彦  
私  
は  
そ  
捕  
、  
の  
も  
彦  
は  
私  
。  
を  
て  
分  
と  
、  
彼  
。  
た  
彼  
っ  
自  
れ  
と  
、  
た  
っ  
る  
作  
も  
そ  
う  
と  
め  
な  
す  
を  
え  
か  
、  
言  
す  
始  
く  
と  
声  
さ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ

「...彦  
「...彦  
私  
そ  
よ  
し  
で  
彦  
で  
彦  
は  
、  
彼  
が  
そ  
覚  
て  
今  
行  
を  
た  
っ  
は  
っ  
、  
の  
彼  
っ  
や  
。  
で  
や  
て  
と  
で  
言  
て  
た  
う  
に  
な  
い  
ち  
為  
い  
く  
み  
柄  
彼  
の  
。  
難  
ま  
に  
し  
人  
い  
て  
し  
っ  
こ  
ろ  
に  
他  
勢  
っ  
を  
だ  
る  
よ  
う  
に  
な  
こ  
初  
う  
関  
ほ  
人  
奇  
た  
た  
思  
彼  
と  
は  
ち  
係  
ど  
、  
妙  
。  
だ  
わ  
は  
こ  
こ  
う  
の  
ま  
い  
」  
と  
と  
よ  
々  
ま  
な  
礼  
こ  
こ  
の  
私  
ず  
、  
そ  
じ  
「  
し  
た  
と  
ま  
来  
は  
ダ  
応  
に  
つ  
ら  
ぎ  
以  
私  
タ  
一  
め  
思  
ふ  
ひ  
手  
、  
で  
た  
か  
ら  
に  
相  
ら  
て  
場  
の  
何  
ふ  
前  
の  
か  
え  
の  
楽  
に  
は  
の  
前  
れ  
ま  
そ  
快  
他  
彦  
私  
は  
そ  
捕  
、  
の  
も  
彦  
は  
私  
。  
を  
て  
分  
と  
、  
彼  
。  
た  
彼  
っ  
自  
れ  
と  
、  
た  
っ  
る  
作  
も  
そ  
う  
と  
め  
な  
す  
を  
え  
か  
、  
言  
す  
始  
く  
と  
声  
さ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ

「...彦  
「...彦  
私  
そ  
よ  
し  
で  
彦  
で  
彦  
は  
、  
彼  
が  
そ  
覚  
て  
今  
行  
を  
た  
っ  
は  
っ  
、  
の  
彼  
っ  
や  
。  
で  
や  
て  
と  
で  
言  
て  
た  
う  
に  
な  
い  
ち  
為  
い  
く  
み  
柄  
彼  
の  
。  
難  
ま  
に  
し  
人  
い  
て  
し  
っ  
こ  
ろ  
に  
他  
勢  
っ  
を  
だ  
る  
よ  
う  
に  
な  
こ  
初  
う  
関  
ほ  
人  
奇  
た  
た  
思  
彼  
と  
は  
ち  
係  
ど  
、  
妙  
。  
だ  
わ  
は  
こ  
こ  
う  
の  
ま  
い  
」  
と  
と  
よ  
々  
ま  
な  
礼  
こ  
こ  
の  
私  
ず  
、  
そ  
じ  
「  
し  
た  
と  
ま  
来  
は  
ダ  
応  
に  
つ  
ら  
ぎ  
以  
私  
タ  
一  
め  
思  
ふ  
ひ  
手  
、  
で  
た  
か  
ら  
に  
相  
ら  
て  
場  
の  
何  
ふ  
前  
の  
か  
え  
の  
楽  
に  
は  
の  
前  
れ  
ま  
そ  
快  
他  
彦  
私  
は  
そ  
捕  
、  
の  
も  
彦  
は  
私  
。  
を  
て  
分  
と  
、  
彼  
。  
た  
彼  
っ  
自  
れ  
と  
、  
た  
っ  
る  
作  
も  
そ  
う  
と  
め  
な  
す  
を  
え  
か  
、  
言  
す  
始  
く  
と  
声  
さ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ

「...彦  
「...彦  
私  
そ  
よ  
し  
で  
彦  
で  
彦  
は  
、  
彼  
が  
そ  
覚  
て  
今  
行  
を  
た  
っ  
は  
っ  
、  
の  
彼  
っ  
や  
。  
で  
や  
て  
と  
で  
言  
て  
た  
う  
に  
な  
い  
ち  
為  
い  
く  
み  
柄  
彼  
の  
。  
難  
ま  
に  
し  
人  
い  
て  
し  
っ  
こ  
ろ  
に  
他  
勢  
っ  
を  
だ  
る  
よ  
う  
に  
な  
こ  
初  
う  
関  
ほ  
人  
奇  
た  
た  
思  
彼  
と  
は  
ち  
係  
ど  
、  
妙  
。  
だ  
わ  
は  
こ  
こ  
う  
の  
ま  
い  
」  
と  
と  
よ  
々  
ま  
な  
礼  
こ  
こ  
の  
私  
ず  
、  
そ  
じ  
「  
し  
た  
と  
ま  
来  
は  
ダ  
応  
に  
つ  
ら  
ぎ  
以  
私  
タ  
一  
め  
思  
ふ  
ひ  
手  
、  
で  
た  
か  
ら  
に  
相  
ら  
て  
場  
の  
何  
ふ  
前  
の  
か  
え  
の  
楽  
に  
は  
の  
前  
れ  
ま  
そ  
快  
他  
彦  
私  
は  
そ  
捕  
、  
の  
も  
彦  
は  
私  
。  
を  
て  
分  
と  
、  
彼  
。  
た  
彼  
っ  
自  
れ  
と  
、  
た  
っ  
る  
作  
も  
そ  
う  
と  
め  
な  
す  
を  
え  
か  
、  
言  
す  
始  
く  
と  
声  
さ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ

「...彦  
「...彦  
私  
そ  
よ  
し  
で  
彦  
で  
彦  
は  
、  
彼  
が  
そ  
覚  
て  
今  
行  
を  
た  
っ  
は  
っ  
、  
の  
彼  
っ  
や  
。  
で  
や  
て  
と  
で  
言  
て  
た  
う  
に  
な  
い  
ち  
為  
い  
く  
み  
柄  
彼  
の  
。  
難  
ま  
に  
し  
人  
い  
て  
し  
っ  
こ  
ろ  
に  
他  
勢  
っ  
を  
だ  
る  
よ  
う  
に  
な  
こ  
初  
う  
関  
ほ  
人  
奇  
た  
た  
思  
彼  
と  
は  
ち  
係  
ど  
、  
妙  
。  
だ  
わ  
は  
こ  
こ  
う  
の  
ま  
い  
」  
と  
と  
よ  
々  
ま  
な  
礼  
こ  
こ  
の  
私  
ず  
、  
そ  
じ  
「  
し  
た  
と  
ま  
来  
は  
ダ  
応  
に  
つ  
ら  
ぎ  
以  
私  
タ  
一  
め  
思  
ふ  
ひ  
手  
、  
で  
た  
か  
ら  
に  
相  
ら  
て  
場  
の  
何  
ふ  
前  
の  
か  
え  
の  
楽  
に  
は  
の  
前  
れ  
ま  
そ  
快  
他  
彦  
私  
は  
そ  
捕  
、  
の  
も  
彦  
は  
私  
。  
を  
て  
分  
と  
、  
彼  
。  
た  
彼  
っ  
自  
れ  
と  
、  
た  
っ  
る  
作  
も  
そ  
う  
と  
め  
な  
す  
を  
え  
か  
、  
言  
す  
始  
く  
と  
声  
さ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ  
か  
て  
出  
め  
よ  
う  
の  
れ















後、ろ少で、きいてかまえ  
てどろぎにおま  
見きいすに  
をと。人、どう  
私、たい、ど  
きてっい、し  
どしかに、も  
きになり、下  
とうかま、以  
はよ続あ、相  
線むが、な、れ  
視込葉だ、ど  
。え言何、一  
た考に、つ  
っは後、の…  
だ彦のあ、そ  
い竜そも、し  
た。、く、は、  
みたは、た、男  
るか度れ「男  
い「…」  
私、何、だ、急  
混、乱、さ、え、し、始、め、て、い、た、そ、れ、は、め、つ、た、る、や、た、ら、と、彼、き、と、し  
だ、せ、線、は、つ、さ、た、で、返、え、時、、抱、い、て、ほ、し、い、ん、だ、っ、た、ら、…、俺、じ、ゃ、よ、く、わ、か、ん  
え、よ、こ、ん、な、…、本、当、に、ム、ダ、で、し、か、な、い、こ、と、し、て、  
」  
珍、し、い、こ、と、も、あ、る、も、の、だ、っ、た、。、言、葉、が、耳、に、痛、い、  
竜、彦、の、言、葉、が、多、分、こ、い、な、な、は、言、全、身、に、突、き、刺、さ、っ、て、い、る、よ、う、だ、っ、て、を、と、い、な、ど、は  
男、に、か、う、。、ん、ら、呼、ぶ、の、言、わ、た、度、さ、こ、な、た、し、、こ、い、こ、へ、喪、か、、つ、身、ち、の、は、失、つ、寂、な、た、  
も、た、こ、い、食、く、。、ん、ら、呼、ぶ、の、言、わ、た、度、さ、こ、な、た、し、、こ、い、こ、へ、喪、か、、つ、身、ち、の、は、失、つ、寂、な、た、  
「、も、ん、な、言、葉、を、聞、い、た、の、は、生、ま、れ、て、初、め、し、て、だ、っ、た、。、  
こ、ん、な、い、け、れ、ど、、こ、し、な、い、気、分、で、聞、か、さ、れ、る、の、は、初、め、か、気、竜  
れ、く、た、る、た、の、か、。、の、の、か、を、感、と、思、っ、た、。、と、な、な、の、た、こ、し、か、い、は、と、そ、き、  
「、何、よ、…、…、彦、の、く、せ、に、…、…、わ、か、っ、た、よ、う、な、口、  
例、え、ば、こ、こ、で、う、ん、わ、か、っ、た、と、か、な、ん、と、か、言、っ、  
通、女、の、子、と、い、う、も、の、な、れ、て、彦、も、安、心、し、て、こ、り、こ、は  
今、こ、こ、か、ら、彼、が、い、な、く、な、っ、た、ら、。、も、う、二、度、と、関、わ  
手、を、使、っ、て、も、止、め、な、け、れ、ば、と、私、は、そ、れ、し、か、考、え、止  
言、の、時、に、い、て、さ、に、向、か、く、れ、た、ら、何、だ、っ、て、良、か、も、つ、良、か、の、だ、。、  
「、あ、ん、た、に、言、わ、れ、な、い、く、た、っ、て、自、分、の、こ、と、く、ら、い  
の、責、任、？、あ、ん、た、は、…、…、奴、隷、な、だ、か、ら、…、…、取、道、具、以、下、責、な  
気、が、付、く、と、私、の、言、葉、は、叫、び、に、な、っ、て、い、た、。、彦、は  
て、哀、し、そ、う、に、私、を、見、つ、つ、も、の、顔、が、お、か、し、く、と、私、は、う、た  
に、が、私、を、犯、す、か、と、思、う、と、う、れ、し、く、て、な、ら、な、か、っ、た  
「、仲、崎、っ、…、…、」  
「、に、が、っ、…、…、逃、が、さ、な、い、…、…、あ、ん、た、な、ん、て、道、具  
か、ら、…、…、手、放、し、て、さ、な、ん、か、。、や、あ、る、も、ん、で、す、か、」  
し、が、み、つ、く、と、。、ど、う、し、て、か、鼻、が、ず、る、ず、る、と、言、い、始



夏休みになって、子供が四六時中家にいておかし  
 ず夏たない気みか  
 らんつもてしての  
 わろかになつ少し  
 変ちな気黙がにい  
 相もはずれ口て  
 はもと少えそをつ  
 母妹ことあ、と思  
 。うかりてこと  
 たた会のとくのい  
 いしでるはなそい  
 たり中い私はとて  
 ったので、子るつ  
 なつ家で様すだ  
 に洗中をのる遇う  
 うを日何ない遭ど  
 よ器か体げてとて  
 る食故一さけ母ん  
 す、何。な設、な  
 をり、るはをて度  
 いたにくといし態  
 伝しのでこ合をや

ほとんどこ家で一人で過ごして  
 りる書か。見  
 りる書か。見  
 サヤコから唐突に電話が  
 、つそつ器体  
 、「夏休みになつてひま  
 彼女、い  
 し日いた。

今時の年頃の女の子と言うには、どうも私は大人  
 び携いムをだの  
 テレビや週刊誌で取り沙汰され  
 ろはしてはなりいか  
 っ最。てそた、

大人  
 こし持なたと電  
 るだ構い立、  
 す黒結て目よう  
 トっはっ、しろ  
 一真いなくでだ  
 デも遣にかいの  
 て色小汰にいな  
 っのお沙とい物  
 作髪て表、らき  
 を。いがどく生  
 氏いてれるな  
 彼なしそけすん  
 といをんだ茶ど  
 々てトロのお体  
 堂っイちるで一  
 、持バもれ店て  
 しえ。ら茶っ  
 いさアだいな  
 な話。いて、子  
 し電いらけての  
 も帯なくつつ女  
 今時の女の  
 りにしたわことえし  
 た由を、思うい消人  
 っ自好しいいら大  
 さい。格うとうでか、  
 あいなろいそれ上て  
 いな手だな、そ頭っ  
 買れ派いくてばかだ  
 をし、なたんれにと  
 品もしわりなけまこ  
 ドかい買帰、よのな  
 のなてにでけつ変  
 ラるもん家手だい大  
 ブえりな。勝分はす  
 り見もグい分自とが  
 たくつつな自、こる  
 っしるバいでどな揺  
 く人めの違者れ倒を  
 た大染ドに法け面心  
 りにをンい無い、  
 ぬか髪ラな。なばも  
 を確、ブしいもれら  
 そう、私はいっも  
 っ最。てそた、

騷  
 はとつら学えりた  
 間こがか、考よっ  
 手なしるか理誰か  
 、倒欲いろ矢のな  
 も面。てお理人れ  
 の、いつは無なら  
 しくにな知出、り得  
 つめらを外は張、  
 傷たがとはと欲で  
 、がしこ私こる変  
 もい欲しい、のい大  
 のたを痛てかんで  
 るれのもっんさ倒  
 す入もて伝なく面  
 かにのと手彦たは  
 事手で時も竜にと  
 何をまた由ん中こ  
 。楽こっ理ろのう  
 る快そ失うち世い  
 ののは、いもはう  
 っ最。てそた、

ではなかった。

結局私も、世の中の十七歳たちとかわりがない。て意気地がないだけなのだ。安全で平和で平凡でのために。

夏休みは課題が片付いてしまおうと退屈で、私の課のサヤコとの約束を話すと、母は、お小遣いってと言っけて私に五千円札を一枚差し出した。差し出とそれを断ろうとした。

「別にお金に困ってないし、ハルコにばれたら当  
「ハルコには内緒にしておけばいいの。お姉ちゃ  
ト代よ」

母は、少しいたずらっぽく笑って言った。私は少受け取った。家にはこの時、私と母としかいなくいでのように私は、ハルコのことを口にしてみた

「お母さん、ハルコとお父さんと、話した？」  
母は、困ったように少し笑った。そして、お父さ所にいて、おやつを食べるにも夕食にするにも中を飲んだ。沈黙がほんの少し続いて、それから私

「私、ここにいないほうがいい？」  
「どうして？」

母は驚いた顔をして私を見た。母にとってみればうか、今まで思いも寄らなかつたことというか、何度か考えていた些細なことを、そのまま続けて

「私がいるからハルコがああなのかな、って、思  
「そんなこと、あるわけないでしょう。何、ハル  
「... 別に、何も」

母は、私の思いつきに少し怒っているようだったはずと考えていたことを、また少し考え始めてうではないと言えられるけれど、好きかと聞かれたらだすうす思っていた。母は、考えて黙り込んだ私をを紡いだ。

「キリコが出ていきたい、って言うなら、それで一人で自由に暮らしたいと思っても、おかしくはふふ、と笑った母は、何だか母親っぽくない顔をは言葉を紡いだ。

「キリコは高校を卒業したらどうしたいの？」  
そういえば何も無く、私は結局三者面談の当日のを明確にはしていなかつた。担任に聞かれたとしか言わないでいた。やりたいたことはまだ見付か  
ない。でも母は、私が家を出る、と言ったのを、  
「でもそういうのと関係なく、いないほうがいい  
「なあに、それ。変なこと言う子ねえ」

母はそう言うのと、何がおかしいのか、くすくす、どな、と思いながら、母の笑う様子をしばらく黙  
「キリコもハルコもうちの子なんだから、ここに  
何にも決まっけてないのに、出ていこうだなんて。  
も、このうちがキリコはキライ？」

「... そんなことは、別に...」  
聞かれて、私は言いよどんだ。考えてみたら、その今まで、私は母親にそんなことを聞かれるなんえななんて用意していなかつた。そのことにうろた  
「心配しなくても、あんたたち二人がお嫁に行くか  
するわよ。心置きなくここにいなさい。もし遠

出ているから、私には、いや、でも、さっさと、から、まわらないし。だけどできた  
いから、私は、やっぱり考えているところが違うから、そう  
も言わなかつた。母は変わらない顔のまま、続け  
「だかからキリコはキリコのしたいようにしなさい  
ないで言うのよ、いい？」  
うん、わかかった、と私は生返事を返した。今は私  
を話さず、たかつかつたんすの、だる、でも、な、と、思、い、な、が、ら、も、私、は、は、の、と、で  
を話さず、たかつかつたんすの、だる、でも、な、と、思、い、な、が、ら、も、私、は、は、の、と、で  
を話さず、たかつかつたんすの、だる、でも、な、と、思、い、な、が、ら、も、私、は、は、の、と、で  
を話さず、たかつかつたんすの、だる、でも、な、と、思、い、な、が、ら、も、私、は、は、の、と、で

それから火曜日、私はサヤコとの約束をはたしに  
るの、夕方、土曜日の夜、だ、ア、バ、イ、ト、を、し、て、い、る、本、屋、も、れ、ば、ろ、っ、ら、ハ、嫌、る、一、何  
の、夕方、土曜日の夜、だ、ア、バ、イ、ト、を、し、て、い、る、本、屋、も、れ、ば、ろ、っ、ら、ハ、嫌、る、一、何  
の、夕方、土曜日の夜、だ、ア、バ、イ、ト、を、し、て、い、る、本、屋、も、れ、ば、ろ、っ、ら、ハ、嫌、る、一、何  
の、夕方、土曜日の夜、だ、ア、バ、イ、ト、を、し、て、い、る、本、屋、も、れ、ば、ろ、っ、ら、ハ、嫌、る、一、何

待ち合わせの駅前に行く、すでにサヤコが待っ  
とある別顔があつて、私は少し眉をしかめたこ  
手を振る彼女の顔は、その顔はにっこり笑つてこ  
「こんにち、仲崎さん。元気？」  
天然のよう、その実きれいに作られた微笑は、い  
わずにサヤコを見やると、サヤコはぱちんと音を  
「ごめんね、キリコ。虎彦がどうしても着いてく  
「それはいいけど…トラヒコ？」  
怪訝もいとこころの目で、私はサヤコと彼、松前  
いまま、  
「言わなかつたっけ？僕達幼なじみで親友なんだは  
「つて虎彦は言うけど、私はお姉さん、の、実は  
虎彦の言葉の直後、にこにこ笑つてい、る、彼、の、ほ、っ  
嫌、い、な、目、で、言、つ、た、い、う、事、情、か、は、わ、か、ら、な、だ  
い、い、友、人、で、あ、る、と、い、う、こ、と、を、改、め、て、知、つ、た、の、だ

それから、私たちは結局三人で、サヤコが「ケー  
お茶をした。私が、夕方からバイトだから、と言  
、へえ、と奇妙な感嘆の声を上げ、それを初めて  
。四人がけのテーブル席で私たちはしばらく、たあ  
した。夏休みはどう、とか、課題はどう、とか、急  
ると、サヤコと虎彦はとつぜん顔を見合わせ、急  
「キリコ、あのね」  
「…何？」  
私はケーキセットのアイスティーをストローから  
子のサヤコを見ていた。そのとで虎彦はしば  
葉を紡がないのを見るとき、苦笑を漏らし、葉を





あ、お故、何だ本困も当と、まは、で本な。汗ん時答ね、て、いら、ひこな何、んた。さなとくね、置かて、はやう、らこつたじ端、しのにくつ曜サよべかはだ、お半たろな上行座、日、るかる私議か、途しよろの、に、どい浮い。思、店暑ん中ま、い、ル、えり、か、れてをてた不、喫もや。りどろ、迎、な、い、けし、み、つ、い、も、は、て、ち、た、か、け、い、ブ、が、と、い、い、ど、笑、か、お、れ、と、こ、つ、わ、い、中、一、コ、の、あ、な、お、に、わ、て、そ、は、り、言、は、な、の、テ、コ、の、ま、ら、ど、顔、は、め、か、と、外、キ、う、私、れ、世、と、サ、て、ま、ら、ど、顔、は、め、か、と、外、キ、う、私、れ、世、と、朝、し、か、お、の、の、や、だ、る、の、そ、し、う、を、ら、わ、。そ、る、く、何、店、え、で、も、て、言、を、が、く、た、は、い、な、。間、が、ね、調、れ、か、れ、と、日、顔、な、よ、つ、彼、て、と、と、時、て、い、口、さ、人、さ、た、た、そ、な、い、か、だ、と、つ、何、う、く、悪、い、明、一、残、い、た、あ、変、思、だ、度、う、作、思、ら、つ、し、説、い、に、て、か、や、は、と、何、態、合、を、ど、と、か、き、て、ら、と、ら、こ、し、っ、あ、は、と、何、態、合、を、ど、と、か、き、て、ら、と、ら、こ、し、か、や、は、と、何、態、合、を、ど、と、か、き、て、ら、と、ら、こ、し、良、じ、彦、う。と、が、顔、れ、。が、き、い、つ、く、そ、を、だ、い、な、と、し、た、だ、。そ、れ、が、日、で、合、ぎ、間、は、番、西、出、り、を、時、私、店、思、い、も、寄、ら、な、い、ア、ク、シ、デ、ン、ト、が、起、こ、つ、た、の、は、。そ、。

平日のせい、それとも偶然なのか。普段アルバ、入アひにととのに、る、メなしり誰、つ、ま、や、て、言、が、し、初、こ、私、う、く、て、退、か、ら、つ、き、も、長、く、い、は、て、わ、な、防、の、す、の、ふ、だ、ど、に、店、な、て、ら、つ、ぎ、ら、と、客、で、は、家、き、屈、き、時、は、し、彼、装、わ、入、る、う、け、私、の、ど、退、と、の、で、探、。を、に、い、い、だ、。店、き、て、は、ト、つ、き、。た、静、別、氣、が、う、る、と、の、と、し、私、イ、ま、つ、か、み、平、。が、ん、そ、す、る、こ、。そ、。バ、し、顔、の、て、い、る、と、や、に、り、な、て、た、。ら、の、て、。い、け、し、い、こ、ち、と、入、に、め、つ、で、が、段、け、る、悪、か、ら、て、く、こ、こ、出、刻、せ、だ、か、な、普、付、か、も、を、と、れ、い、り、な、を、時、。か、静、い、。見、わ、で、声、ぎ、ば、て、キ、屈、店、す、員、静、的、思、た、く、ば、合、と、わ、構、れ、。退、て、だ、業、り、較、と、い、よ、れ、具、。に、結、ら、に、。し、え、従、な、比、あ、て、を、見、。か、め、か、と、長、は、り、見、の、か、は、な、し、の、を、は、た、た、う、を、店、日、た、が、か、は、内、い、を、る、顔、き、し、る、言、物、で、の、し、星、ほ、。店、店、な、と、い、。と、ま、え、と、り、げ、そ、文、で、。た、日、い、に、こ、て、休、た、れ、抑、何、売、か、。注、れ、か、い、は、し、や、ぐ、声、と、と、も、に、小、学、生、が、数、人、店、に、な、だ、れ、こ、ん、者、入、く、見、何、夏、護、に、暗、に、と、て、保、店、。ぎ、。つ、る、て、か、の、か、だ、い、つ、と、し、う、生、て、言、。屈、ろ、学、。し、と、な、退、だ、小、に、率、わ、だ、く、の、。う、う、引、や、り、ら、る、う、ろ、に、き、張、ば、い、ろ、だ、と、言、う、の、に、家、に、ろ、く、に、特、わ、っ、し、て、だ、る、。だ、き、く、つ、課、は、の、言、う、起、暗、言、。と、そ、と、ほ、は、や、宵、を、つ、ん、困、つ、で、も、と、た、て、。供、の、に、き、は、団、帰、る、々、。な、つ、ば、て、教、れ、。ナ、団、。供、一、に、い、後、。な、つ、ば、て、教、れ、。ナ、一、は、子、の、家、て、は、。に、い、け、し、を、け、か、一、ぐ、ち、の、そ、頃、し、て、。く、は、お、探、強、た、と、こ、や、た、時、は、今、ご、い、。近、の、て、に、勉、つ、生、具、し、子、今、私、は、過、で、。昼、る、つ、死、に、か、学、文、は、の、。子、に、ん、。く、放、必、親、な、小、は、と、女、た、ら、の、う、遊、。く、を、両、わ、の、私、わ、の、つ、が、い、ふ、日、思、え、ば、あ、の、子、は、。に、遅、っ、は、コ、や、ま、時、。に、帰、私、ル、私、か、今、く、。

が、ベとも変にちがデ。  
なてうつつをとあ供いた  
しつ言おいジこの子しえ  
話ばとはかされる内、ら見  
にら、ん故にえ店らいが  
う散くさ何ん甘はがわ頭  
そによ奥とさに私なかの  
しらグの、奥葉てり。子  
樂ちン長ての言し回たの。  
をこミ店しそのを見し女た  
からイ。りてそりを動のけ  
とちタたかっでフ子移いか  
ごあどきつ言のく様とらを  
何のうてしとた行のへく声  
、店よつに、れにち棚歳で  
間とちや当にわたの十り  
のる。に本い言イ供置、ぶ  
しすた店は洗とト子位とそ  
少くしがん手、。るいるい  
はら知んやおらたいいら来な  
ちば察さちとたつてづに気  
たしと奥コつきかし見く何

「ちよっ」とは私のおそれるこちを驚いた様子で、少し  
そしておそれるおそれるこちを振り返った顔を見  
「…ハルコ？」  
彼女の手元から、棚に並んでいたはずの小さな消  
。ほんの少し顔をのぞかくせたくは、それでも十分  
混乱した。ハルコはびくびくしながら視線を上

「おねえちゃん…。」  
「あんた…このなか…時間…買…いの？」  
何をしていたのかわかって私には、それなのに  
今、来はんを  
もう私もずし  
でな、い。て  
に見な明な先  
に格ら、いた  
た格ら、いた  
こ格ら、いた  
の格ら、いた  
が格ら、いた  
な格ら、いた  
い格ら、いた  
く格ら、いた  
ら格ら、いた  
い格ら、いた  
困言。た床  
つ葉そ。に  
たをれ私落  
目返なたち  
をしのは品  
してもはほ物  
てにはは品

「おねえちゃん…。」  
「これ、ほしいの？お姉ちゃんが払ってあげよう  
デザインの筆箱とかもあるよ。見る？」私は少し思  
自前でも何を言っていた。あれどき何の、も言わな程度  
思議子てハルコに買っつてか本や、はたかい思つた。たの。あんた  
をハルコは、やっぱり何にも言わなかつた。ただもう  
「この前お母さんにお小遣いもらったの。あんた  
ハルコは、やっぱり何にも言わなかつた。ただもう

「この前お母さんにお小遣いもらったの。あんた  
ハルコは、やっぱり何にも言わなかつた。ただもう  
サギ返こ店かもは、  
のてらっ内ずでハ  
よきなてはにきル瞬  
うたかい直いなコ正  
目おたの変。自顔を  
をしハ足気静はと無い  
てル音が、か、が理た  
私、主いなうぎ理は  
をどはたっ混り上、  
じう複らて乱あげ勢  
つし数し、しっさい  
見んて、たは、ま  
つだ、そちいそ右ま  
めよ私のはなの手横  
て、とままか後でを  
いと、まるっにそ向  
た少目バでたはのい

トイレから戻ったフリでレジに戻り、私は妹が持  
をひとそ、ろたいそ、く  
を立、かね、  
を嘘をて聞わ  
を、は目じもち  
店私にやなや  
長の少婦くん  
のすしら、に  
奥ぐ涙なえ何  
さ後がくえを  
んろたち、買  
に、でまやとつ  
、ふっね答て  
、すて、えも  
みくいとたら  
まさた言。っ  
せれ。っ奥た



倒だこきつば、かど  
面んるい聞てのぼが  
、なハ悪にとこのれ  
い満は。なは。こ  
し不私いん私た。ぼとら  
うが、なこ、つわき  
と何でし、とかのん、  
つい中りはうないて  
うたのたコ思れ溢たれ  
、っ胸つる。ら、ハとそ  
いい。言ハうい泣に  
な。にもてろは、て目  
やうせ誰しだてっが  
じろくてうん見だ涙  
談だいいんどいを私に  
冗んななに弱コ…  
、なきだのセル…  
いうでろなくハ…  
たふもい。の、  
みな何でいそて、  
かん、子な、っ「私  
ぼこていわでな、

、間立りはしつ  
のにマ私んじ  
つ々々、死  
い所力に、か、  
、がのうんら  
すてト鉄よな  
ぎイ鋼る前  
過うなけお  
りのき付！  
我のき付！

、自動車が号音を  
激い連で  
だでコてそつ私  
しんるルし、狂が  
は叫まハ定てれの  
ききはが安え荒も  
で泣と母て思にな  
うてのかんでうか  
もげくつなまよ静  
て上泣い緒とのに  
んをが。情い嵐う  
な声子たどなくよ  
と大のけほわしの  
こは女続よま激海  
る私のきがかでだ  
す、歳泣うもまい  
制で七はほてれ風  
を中十私のっそ、  
分ののく私な。う  
自音通らのうたい  
で号普ば今どいと  
分く、し、うて、  
自いあ、どもしや  
はてがでれ、戻い  
ごうごうと、

の先とは。たコ違も素  
何私いしルに、の  
だたなかハるて私  
たまいしけすっる  
に、りもだいなあ  
ころとま、しせくに  
こうあら少いし先  
と思はた、世人の  
なう人ってと大こ  
なそるなえつも、  
困く考きとら  
望うてなう。りな  
希望うてなう。りな  
希ろついそくない  
もだだがはろ少な  
い、夢とん私私だ多  
消え。こ死。るにう  
消え。こ死。るにう  
いながどいす後そ  
な敵私けながたし  
も素、うれ気えも  
値てしろしな消、  
死にたも素、うれ気えも  
のなな倒かど私れ



いまいましてげに竜彦は言い、ふてくされた顔でソイトに照らされた顔は、いつもと全く変わらないやりに、幻でも見ている気分で見ている。竜彦言葉葉を放った。

「今、出稽古の帰りなんだよ！警察の道場の。遅んが送ってくれてんだよ！それを、こんなところ

「何よ、それ……」

何がなんだか私にはさっぱりわからなかった。だつとやらに送ってもらえばいいのに。思っている私言葉葉を吐き出す。ぼんやり私はそんなことを思いな言葉を、ただ聞いていただけだった。

「おまえが変な顔してふらふらしてたから、止めとか言われて冷やかされて、挙げ句にここからこつた、つってんだ。この大ばか！」

竜彦に怒鳴りつけられて、私はそれでもぼんやりは一人で何か言っていたようだった。けれどしばぞ、と口にした。

「何？」

「何、じゃねーよ。こんなところでぼやぼやしてこんできて、危ないだろ？」

少しわけのわからないことを言っていて竜彦は歩き出た。力任せに握られた左手は少し痛くて、それはなし。驚いているばかりで本当に何もできずに私はしな。い気持ちや憧れは私の中には欠片も残っていない。かんなるとか、そんなことすら考え始めたい。

それからしばらく歩いて、私たちは幹線道路沿い  
 入った。私ウ  
 く、たそい  
 な返とを聞  
 少みる文  
 も睨く注  
 気をて、  
 人れぼめ  
 はは運か  
 には彦がし  
 ス彦水を  
 レ竜水を  
 ミにて眉  
 ア逆いは  
 フ、着彦  
 のどに竜  
 日れ席。  
 平け、た  
 て、。てい  
 見ていて言

「吸うの、かよい？ここ」  
 「何よ、悪い？」  
 いっも持ち歩いているポーチの中身はいつもと同  
 一も入っでいきな。私には誰にほだ私を  
 まらでくの複雑顔をし何てはだ私を見  
 「……何よ、今この」  
 「別なら、私たの通りはだと思っただけだよ」  
 しばらく、横顔をみながら煙草を吸って  
 、私は彼のお顔をみながら煙草を吸って  
 「あんな……出稽古っ、何してあ  
 「何彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 竜彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 うまのか言っていまた。ぼ一っのとし  
 大のたき前つよに私をみりてい問いかけ  
 だたのたき前つよに私をみりてい問いかけ

「……何よ、今この」  
 「別なら、私たの通りはだと思っただけだよ」  
 しばらく、横顔をみながら煙草を吸って  
 、私は彼のお顔をみながら煙草を吸って  
 「あんな……出稽古っ、何してあ  
 「何彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 竜彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 うまのか言っていまた。ぼ一っのとし  
 大のたき前つよに私をみりてい問いかけ

「あんな……出稽古っ、何してあ  
 「何彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 竜彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 うまのか言っていまた。ぼ一っのとし  
 大のたき前つよに私をみりてい問いかけ

「あんな……出稽古っ、何してあ  
 「何彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 竜彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 うまのか言っていまた。ぼ一っのとし  
 大のたき前つよに私をみりてい問いかけ

「あんな……出稽古っ、何してあ  
 「何彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 竜彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 うまのか言っていまた。ぼ一っのとし  
 大のたき前つよに私をみりてい問いかけ

「あんな……出稽古っ、何してあ  
 「何彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 竜彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 うまのか言っていまた。ぼ一っのとし  
 大のたき前つよに私をみりてい問いかけ

「あんな……出稽古っ、何してあ  
 「何彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 竜彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 うまのか言っていまた。ぼ一っのとし  
 大のたき前つよに私をみりてい問いかけ

「あんな……出稽古っ、何してあ  
 「何彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 竜彦は……稽古だぼうに答えて、私  
 うまのか言っていまた。ぼ一っのとし  
 大のたき前つよに私をみりてい問いかけ





た私から視線を反らした。何だか本当に怒っていた。

「……仲崎？」  
怪訝そうに竜彦がこちらを見る。私は笑っていた。なり竜彦の視線はしばらくすると少しその色を変えたり混じった顔にならなると、彼は言った。

「……泣くなよ」  
視線のやり場に困るようになり、竜彦は目を伏せた。私れ悔てようやく、自分で涙に気が付いた。竜彦はちを悔しそやな顔を、自分で吐き出すように、また葉を

「自分で言っても……そんなふう泣くなよ」  
それはとて不思議な感覚だった。私の心は静か

も流れるていて、哀しいもつまらなくも何ともしなかつた見  
てこけたといたし、感く、寂しい、ま自分、がどうもかたし  
問いか状態おの唇が、不自然に震え、何彼うい変わに  
か、自分分の唇が、不自然に震え、何彼うい変わに

「……このまま、死にたい」  
働泣を自覚まで、たのはそれからだ。涙はそれ

で騒いにさりがつ、あふれ出、して、体中を、何だか、とて、つ、も、な、く、哀  
ぎ始れ、ても、う、生、は、お、び、え、と、よ、に、だ、私、み、融、た、つ  
いた、あ、れ、一、な、乾、な、れ、て、中、何、を、に、こ、に、溜、ま、に、も、か、え、ん、伏、で、と、え、止、ま、ら、な、が、く、た、そ、そ、つ、け、い、た、。  
か、う、な、い、れ、る、気、が、し、う、な、」  
う、言、っ、た、。、顔、を、上、げ、ら、

「ばか、な、こ、と、……言、う、な、」  
低く、小な、よ、う、に、乱、暴、で、私、の、お、ろ、か、な、言、葉、に、対、し、い、  
い、に、ら、思、つ、も、の、に、ら、、優、し、ど、ん、な、に、気、持、ち、は、楽、だ、ろ、う、。、心、地、よ、い、

「そんなふう……その低い声で言っただけ。私はその

よ、う、も、な、く、哀、し、く、て、な、ど、う、し、よ、う、も、な、く、苦、し、か、つ、意、  
れ、に、し、た、か、ら、っ、た、。、

それから、もう泣くな、そんなこと言わない、と、  
れ、が、方、で、も、ま、ら、し、く、の、わ、わ、た、し、な、を、を、に、し、た、は、幽、霊、の、よ、う、に、ふ、ら、ふ、ら、と、  
、閉、せ、し、行、い、た、。、

気が付くと、目の前で竜彦が大きな荷物をコイン  
。私はその時、ぼんやりと、自分ごと、こ、に、い、て、何、を、  
いに無事に歩いた。夜半、荷物、人、通、り、も、車、の、鍵、通、り、格、段、に、減、  
た、ど、り、つ、い、た、の、は、駅、近、く、の、人、気、の、ま、る、で、な、い、公、  
所、は、ど、こ、も、な、か、つ、た、。、こ、の、辺、り、で、は、ゲ、ム、セ、ン、タ、  
に、





「… … っ て、 おい ま え、 な あり … … 」 な る と、 う ち の 人  
「今 何 時 の 顔 に あ き ん の 表 情 を 浮 か べ て、 葉 も  
竜彦は少したった。彼の顔を見てると、それだ  
「そういおうて、えは… … 帰らなくいいのかね？」  
「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」  
「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」

「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」  
「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」

「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」  
「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」

「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」  
「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」

「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」  
「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」

「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」  
「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」

「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」  
「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」

「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」  
「… … 仲崎？」 また笑ってしまった。  
「どうしてあんなこと気にするの？ そんな  
も っ い の に」

なかいい笑いと悪地の意きどき、いと、か、の、る、い、て、っ、かん、わ、が、ち、  
なかいい笑いと悪地の意きどき、いと、か、の、る、い、て、っ、かん、わ、が、ち、  
なかいい笑いと悪地の意きどき、いと、か、の、る、い、て、っ、かん、わ、が、ち、

何事だ、なんて考えているひまはなかった。父と  
飛ばさ、れ、て、い、た、が、ぼ、一、ん、ち、を、と、体、が、投、げ、出、さ、れ、を、重、  
飛ばさ、れ、て、い、た、が、ぼ、一、ん、ち、を、と、体、が、投、げ、出、さ、れ、を、重、

「早く中に入りなさい」  
「早く中に入らなさい」  
父も母も、早く見ななさい

「お父さん！」  
竜彦は、そのまゝ父に殴り倒された。彼の体はそ  
ルトの上、に叩きつけられた。ものすごい音がして

「お父さんやめて！やめてよ！」  
竜彦は路上に倒れた体を起こしながら、小さくい  
かろうとした。私は父に体当たりするいきおいで

「キリコ、家に入っていなさい。じやまをするな  
「やっ…何、何言ってるの！お父さんやめて、  
竜彦は路上で、少し切れたらしい口元を拭いなが  
父は力任せに私をふりほどき、離れた私はあわて

「竜彦…竜彦、大丈夫？」  
「竜彦…竜彦、大丈夫？」

「キリコ、そこのどきなさい。家に戻るんだ！」  
「やっ…いや、いや！お父さんやめて、  
金切り声と言おうにさ、どきなさい。家に戻るんだ！」  
「お父さんやめて！やめてよ！」  
竜彦は路上に倒れた体を起こしながら、小さくい  
かろうとした。私は父に体当たりするいきおいで

今時テレビでだってこんなクサイ科白をはいたり  
ろうと、いうくたらのことを、私はやっつけていた。す  
きな声で言った。私は首を横にぶんぶん振って、  
「キリコ……おまへはもういいから、家に入るん  
じれったそう。お父の声は聞こえた。それにも私は  
横に振った。叱咤の音が大きくなる。普段無口で  
当怒っているようだった。  
「キリコ、いいかげんにしなさい！」  
「な、何よ！こんなときだけ父親ぶって！いつも  
草だつてやめろつて言わないくせい！朝帰りした  
がそんな信用できないの？サイテ一よ！」  
「ほか、親に向かつてそんなこと言うな！」  
そう言つて怒鳴つたのは竜彦だった。私はいつの  
に驚いて、彼を抱きしめていた腕の力を思わず緩  
りに、父の前を歩み出ると頭を下げた。父は驚いてた  
の、恐れをなした。父は驚いてた。父は驚いてた。  
「昨夜は……俺が連れ戻してました。こいつは何  
らないうでござい……俺が全部、責任とります。」  
今時の高校生が吐くには、すさまじくかっこ  
なつて、それかから何も言わなかつた。私を始  
などくどくどと心臓が急に大きくなつて泣き始  
場まで私をはたまたまあかつた。

それから、私は母に促されて家の中に引っ込んだ  
やりと笑つた顔があつて、思わず小さな声で、ぼ  
したのかは知らない。父と一悶着あつてから、帰  
隣で泣いている母にお風呂と食事を進められ、私  
。体は、一晩中起きていたためなにか、今さっき  
けれど、ベッドに入つても私はなにか眠れなかつ  
彼と交わした会話の思い出を少し泣いた。  
それでもそうこうしているうちに私は眠つてしま  
つた。毎度このことが思いださなくて、目が覚  
たら、いよりの長くなるので一晩中、いよりの長  
そばりがするの、でかすまわらな。いよりの長  
シャワーと食事が済んでしまふと特別にやること  
し腹が満たさお、さう思つた。さう思つた。さう  
「おねえちゃん、いる？」  
おどおどしたその声が自動的に私を呼ぶのは、思  
い眠るの間に私の頭にもやがてかかると、一瞬返  
の問返す私に「おねえちゃん……怒つてる？」  
「おねえちゃん……どうも不機嫌そうだと感じた  
飯を食べたら眠くなつちやつた。普段と変わら  
見困つたよ。眉をしかめた。私は、それを見  
「おねえちゃん……ごめんね」  
「……何が」

「ごめんに、さ、い」段以上、頭の回転は悪くなっている。私は黙って、返り、反  
い、傾げで、「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は  
「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は

「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は  
「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は

「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は  
「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は

「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は  
「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は

「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は  
「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は

「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は  
「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は

「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は  
「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は

「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は  
「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は

「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は  
「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は

「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は  
「ごめんに、さ、い」が？」で、ハルコが言っていて、私は

立て度  
にが二  
所や、  
場はで  
の母目  
そ。度  
、た二  
ていは  
えての  
さ見る  
押くれ  
だらら  
たば謝  
をしは  
涙に日た  
るず今い  
くわ。て  
て言たっ  
れもっ惑  
ふ何言戸  
あをくし  
、母さ少

「お母さん？」  
「でも良かった… … 帰ってきてくれて。キリコが… …」

母は泣きながら、良かった、とごめんね、をくりなかつた。しばらく母はそうして泣いていて、少

ハルコが泣いて帰ってきたこと、私がバイトに行  
て私だ、っ、考とどみ何と母笑  
つかとい迷でとう、らにう。し  
待つこさかの、思てた母また少  
ていのなのもなうく見、しっで  
きはとんななだそならはてま顔  
起母ためき妙便。はか私いしの  
中とつごべ奇不うで目。付て別  
晩父合、る。をろ歳傍た片えは  
一、しみえたれだ七、つがたと  
でつて涙かて、るた便し夕うっ  
明待せし何っでなめ不ての、さ  
不をわ少。笑かう冷くっ前て、た  
方の合たたにこどにないのっかけ  
行るきまいうどは変もま目のっか  
はくつてよの私のつ実、またい  
私てをっして心先もて真てとい問  
どっ頭言揺っのつと、れはつに  
れ帰もと動困のこいはてく私が私  
けがと、にてな、はれえふた気で  
。私人で変見れで私そ思がまに声  
とで当り、をそりの。と腹、とな

「今朝の彼、彼氏？」

「… … えっ？」  
「キリコっつても、意外と面食いなね」  
母は、いっつもより少し機嫌のいい母にいつの間に

メントに、驚いて何も言返せなかつた。ぎーぎ  
大きかつた。私は何も言わずに、しばらく母の後  
「一度ちゃんとして紹介してね。お付き合い、してる

「っああ… … うん、まあね」  
私は曖昧に答えて、逃げるようにキッチンを出た  
ながら、お風呂も入れるわよ、と、立ち去る私の

それから、私たち家族に何か特別に変化があった  
た。父は相変わらず無口で、さすがに私の朝帰り  
ない。なっ変なこを母はそれ、少し困るは子ま  
曜には、二人して無言で夜道を歩いた。私もした  
ハルコは、ちよっただけ素直になつた。ときどき  
りしなく、なっ。毎日家にいて、出かけても夕方  
りまで出か、私、手家が空いてるというにわ  
たり、ごく普通の手が家族のよ

四日目、そんな最中にサヤコから電話がかかって  
電話に出ると、開口一番サヤコは、明日のことな

「… … 明日？何かあった？」  
「キリコ、今度の日曜がひまだったら一緒におで  
たの？」

受話器の向こうでサヤコが驚いたように声をあげ  
のとても忙しくて長かつたり日にしていたことを思  
、私はそのことをすっかり忘れていたのだった。





計ク考たかい  
余ツをっとし  
はヨ何か、ら  
私シ、なたと  
「で、ばて来つぎ？」  
のう、れん出合わ  
なよみながし、  
りのてい事話くだ  
も抗しなるで  
つ抵にさい人大  
る、もって私  
てす、もって私  
っが、ん、は交た  
や供、なず私をつ  
う子、見、母か  
そで、たもではな  
でる、しららとわ  
ままりちやコ言  
つは帰こつルも  
いれ朝立ハ何

「おは父否」とも、何うと、話も言なわ、つかもつ。コッブ  
父は「冷蔵庫なら冷たい、麦お茶疲があれ、るわよ。水水道の水が、

じゃ父  
つにれにでない、くのでな  
思、うそ父いいてもまことん  
をよ、はつてつてううこそ  
とるら私にし思つといなは  
こ反か。とをは言族と単私  
なをたたたこととは家、簡。  
ん中めいこの、とらまな  
そ背勸つそいい、なまんし  
はし、を、悪なるとのそ出  
私少や息てが方いい分、き  
あ、ていたつ分仕てる気な歩  
る、おかげ、まも自もしきなうら  
ん上もてし。と滅でやよか  
もをてつたこ幻、いる前  
る顔め思んいた、てにきの  
や。勸う込てれてついでし  
たがそ寝つらしだ互か流  
しっ私はがな殴そ私おとて  
、かと私母く、。、何っ  
となつ。、強にだたも黙  
こしきいてと日うって人、

「お父さくんのこやめ、また、私なりか見、な、い、で、いた、る、気  
父は、う事にも、ついたら、い、な、い、よ、ど、う、な、の、私、の、顔、な、ん、か  
い日こ  
「何とんか言いなさいよ、ど、う、な、の、私、の、顔、な、ん、か  
」

叫んでから、私は自分が泣きたくなっているのだ  
、四六時中誰か一緒にいて、それなげれば、辛くち  
いを拒否して、いなる思え、言え、いいじゃない、キラ  
「だつたら、うやっ、言え、ば、い、い、じ、や、な、い、キ、ラ  
、捨てるや、う、の、に、！」  
、こんな風だつたら、い、っ、その、こ、と、捨、て、ら、れ、て、し、ま  
とは、振返らな、か上、た、つ、そ、の、場、に、固、ま、っ、て、歩、き、け、た、気、と  
と、背、中、に、よ、る、の、を、し、う、と、悲、父、が、細、く、こ、こ、の、言、つ、て、中、が、ち、目、を、で、き、い、や  
い、る、と、言、う、ん、だ、」  
「だ、っ、ら、う、言、っ、て、よ、う、や、と、く、振、り、返、ら、な、い、だ、」  
父は、見、吐、き、出、す、私、は、そ、の、目、に、驚、い、て、そ、の、場、で、固、ま、っ、

私でも吐き出す。私はその目に驚いて、その場で固まっ  
「そう思っ、て、きたのは、キラコの方だろうか。確かな  
んて、もういらないだろ？」

「お父さん…」  
「出て行きたいなら、そうしなさい。父さんは何  
れでもいい」

父の言葉に、私は混乱した。この人は何を言っ、て  
そ、う、思、う、と、も、う、訳、が、わ、か、ら、な、か、つ、た、方、出、て、行、き、か  
こ、と、を、思、っ、た、も、う、言、う、の、だ、出、て、行、く、方、が、い、い、か

人もぶるぶもに。いて、ぶるぶも  
に。いて、ぶるぶも  
に。いて、ぶるぶも

「誰もそんなこと言っていないでしょ。それに、私  
う、キリコなんかない？どっかには行っちゃえ  
言いがかりが小学で、それは私も、私に冷やかに  
が答えらなく、それと、答えらなく、私に冷やかに  
中の怒りは収まって。思おうまに、私は怒る  
「タバコのことで、目の前で堂々と吸って  
同じくらないに、他に何にも話さるな、あつて  
平気なうで、理由も悪いか、何か言わな、どうして  
殴られて、理屈も聞かなくて、あつて、あつて、あつて  
体のふるえが声の震えになつていた。唇が歯に  
もどかしくなつた。私が怒鳴り終えると、父は、

「そんな事を聞いて、父さんにどうしろつて言う  
「そちらか竜彦に答えてよ！父答えなさいよ！」  
「いっつか竜彦に答えてよ！父答えなさいよ！」  
し、父は、初め、言おう。これなら、  
、そちらか竜彦に答えてよ！父答えなさいよ！

「キリコが… …いなければならない、聞くと、  
小私のとこで父は言ってきた。そして、今度は父が  
どして、言ってきた。そして、今度は父が

「どこかに行って構わないなんて、思うものか  
ないか。それ、私、父を見ない。父はそれ以上何  
、少しは私、今、この頃、髪は、音をたて、父を、  
、少しは私、今、この頃、髪は、音をたて、父を、

「お父さん、キリコ？何してんの？何、キリコ。  
声を聞いて、あつてお風呂から出てきたらしい母  
ら、母は、髪を、顔を上げる。母は、髪を、顔を上げる。  
、母は、髪を、顔を上げる。母は、髪を、顔を上げる。  
「何でもなつて、何でもなつて、何でもなつて、  
「だかから… …何でもないつてば」  
「おろおろして、何でもないつてば」  
るようにして、ここから離れた。父に抱っこされて

な っ た 。 母 の 顔 を 見 な い よ う に し て 、 そ の ま ま 私  
る 間 、 背 後 か ら ま だ 混 乱 し て い る 母 の 声 が 聞 こ え  
「 お 父 さ ん 、 何 か あ っ た の ? キ リ コ 、 泣 い て た で  
「 … … い い じ ゃ な い か 、 そ ん な こ と 」  
「 良 く あ り ま せ ん ! あ ん な こ と が あ っ て 、 キ リ コ  
参 っ た り 傷 つ い た り し て る の よ ? 大 体 、 あ れ か ら  
コ と も ち ゃ ん と … … 」  
私 が 部 屋 に 入 っ た 後 も 、 し ば ら く 、 母 の お 説 教 の  
そ れ を 自 分 の 部 屋 で 聞 き な が ら 、 私 は ぼ ん や り 、  
え た 。 そ の 上 、 手 け ぬ け じ ゃ ない な ら し て 、 私 は 単 位 で 、  
言 が 欠 け なく も 恥 づ け ない 気 持 ち だ っ た 。 大 切 な も の で 、  
つ ら っ た と 眉 を し かし め て 言 っ た 。 聞 け ない だ っ た 。 ま っ た 、 外 か  
「 お 姉 ち ゃ ん 、 お 父 さ ん と お 母 さ ん 、 何 し て る の  
「 … … さ あ 、 何 し て る ん だ ろ 」 … … う る さ く て 、  
う ん ざ り し た ハ ル コ の 言 い 方 に 、 私 は ぷ っ と 吹 き  
し そ う に 見 て い た 。 そ し て 、 し か め た 眉 も そ の ま  
「 お 姉 ち ゃ ん … … 泣 い て た の ? 」  
「 … … ち よ っ と ね 」  
不 安 気 、 と い う よ り 、 心 配 そ う な ハ ル コ の 顔 を 見  
の 間 、 そ ん な 私 を い ぶ か し ん で 見 て い た 。 け れ ど  
に 戻 っ て 来 な っ た 。 し かし 閉 ま っ て 見 と 、 私 は 一 人 で  
か は っ た 。

それから、何事もなく時間は流れて、日曜日は誰  
 て来。た。そ。の。朝。私。は。日。曜。だ。と。言。う。の。に。夏。休。み。  
 人出。た。る。の。度。し。静。か。い。で。た。父。の。社。にも。み。  
 体ら。し。け。支。奇。に。に。に。か。て。の。り。の。も。休。で。中。  
 か。し。こ。誰。時。確。で。器。い。の。支。奇。し。切。過。掛。時。げ。、を。に。連。こ。て。る。く。と。私。し。静。れ。と。も。ん。を。は。て。か。て。な。現。で。指。も。日。い。で。い。く。れ。し。し。し。曜。た。ほ。か。や。な。よ。示。も。だ。ん。れ。っ。か。う。し。し。と。父。の。る。て。っ。て。、言。の。り。の。き。た。と。い。も。う。会。涼。だ。て。。言。て、の。社。し。ろ。、八。っ。、仲。に。も。い。う。け。時。た。こ。崎。、休。家。、れ。を。頃。れ。で。夏。み。の。と。ど。過。、は。す。休。で。中。、私。ぎ。我。き。が。み。で。一。を。て。が。っ、

「キリコ。ごめん！今から行くから。本当にごめん  
 結局、サヤコが我が家に行かなくて来たのは十時近く  
 よ。り。確。実。に。気。温。が。上。が。っ。た。自。宅。の。玄。関。で。ち。よ。っ。と。わ。  
 を。な。少。し。な。て。い。っ。と。実。気。あ。い。も。に。に。と。て。に。我。が。温。て。、次。が。家。に。い。来。に。上。た。い。来。に。が。と。た。や。っ。ど。こ。驚。っ。た。こ。ろ。き。て。自。へ。は。に。来。て。宅。何。叶。や。て。、の。を。わ。や。、玄。し。な。呆。私。関。に。い。然。を。見。ち。く。あ。し。る。よ。の。と。て。な。っ。か。か。し。り。外

「虎彦、お待ち。早く行こう。」  
 玄関の門の外に、その姿はあつた。手首を捕まえて  
 返った。さわやかは笑顔を少年の顔に驚き、わすか  
 にいた。向かっ。て。小。言。め。い。た。こ。と。を。言。い。始。め。た。  
 ヤコに。向。か。っ。て。は。私。に。そ。の。少。年。の。さ。わ。や。か。を。驚。か。せ。て。向。け。て

「おはよう、仲崎さん。今日はごめんね。全く、  
 に寝坊するなんて」

「もお、謝ったんだからいいでしょ！それに、虎  
 ばいじゃないの」

「我が家は今朝から大騒ぎで、そんな余裕はなか  
 ぶう、と膨れるサヤコと、それをしなかる虎彦の様

あ。え。ず。こ。の。二。人。さ。が。あ。つ。て。、私。は。私。は。サ。ヤ。コ。を。思。っ。た。と。見。  
 。一。人。取。り。残。り。が。あ。つ。て、私。は。私。は。サ。ヤ。コ。を。思。っ。た。と。見。  
 な。ち。わ。が。つ。い。て、言。っ。た。私。は。私。は。サ。ヤ。コ。を。思。っ。た。と。見。  
 気。が。つ。い。て、言。っ。た。私。は。私。は。サ。ヤ。コ。を。思。っ。た。と。見。

「ねえ、どこかに行くんじゃないの？」とその様子  
 二人は私の言葉に我に返り、そうするとその様子  
 足で歩き出して、虎彦はまだブツブツ言いながら

「ちよ、ちよっ、と……一体どこに……」  
 「いいから、話は後で！あーもー、虎彦がブツブ

やない！」  
 「あのね、人のせいにしてくれる？そもそも

」  
 わけのわからないまま、私はその会話を聞いてい

子供をしめるような口調だった。  
 「これで竜彦の出番が終わってたら、全部サヤコ

「竜彦の、出番？」  
 気がつく、私たちは三人そろって駆けていた。

をかしげた。竜彦の出番って、何だろう。思った  
 を問いかけてみた。

「ねえ、竜彦くんの出番って何？一体どこに行きた  
 ぱた、と、二人の足が止まったのはその時だった

走りすぎる。そして二人を振り返ると、  
 「サヤコ、何？仲崎さんに一番大事なことって

「言ったわよ！今日□△市の体育館に行こうって

「… …聞い て な い け ど 」 て い る の か た さ っ ぱ り わ か ら  
私 は 一 体 何 事 な が 起 こ っ て い る の か た さ っ ぱ り わ か ら  
の 後 、 そ ん な ふ う に 言 の や サ 浮 葉 ろ ん ヤ か を の と コ ベ を 漏 ろ 約 は て 、  
き 出 し 、 も な い 私 疲 れ …… ど こ ば へ 何 し に 、 い く の か い し ら 」 ヤ コ で  
、 彦 は も な い 私 疲 れ …… ど こ ば へ 何 し に 、 い く の か い し ら 」 ヤ コ で  
で 、 彦 は も な い 私 疲 れ …… ど こ ば へ 何 し に 、 い く の か い し ら 」 ヤ コ で

「それは改めたい。……ど半彦は肩をすくぬると、ヤコで  
「まあ、先は、彼の質さ彼は普通の綺麗な仮面笑顔を戻っ  
「行く言、先は、彼の質さ彼は普通の綺麗な仮面笑顔を戻っ  
と全くと同じで、あつた。に、みか、わら、ず、全、く、違、う、外、見、中、  
そ、の、目、的、は、……ち、よ、う、ど、い、い、か、ら、秘、密、に、し、て、お、く、よ  
え、る、だ、ら、う、し、」  
「……何、そ、れ、」  
口、元、に、人、の、差、指、を、寄、せ、て、ナ、イ、シ、ョ、と、ま、る、で、女  
コ、い、け、こ、返、し、た、。

私、た、ち、は、と、り、あ、え、ず、駅、に、出、る、た、め、バ、ス、に、乗、ろ、う  
通、り、も、大、札、た、言、ち、は、私、は、と、り、あ、え、ず、駅、に、出、る、た、め、バ、ス、に、乗、ろ、う  
で、改、に、て、た、私、は、私、は、と、り、あ、え、ず、駅、に、出、る、た、め、バ、ス、に、乗、ろ、う  
は、思、っ、た、っ、た、。 彦、は、私、は、と、り、あ、え、ず、駅、に、出、る、た、め、バ、ス、に、乗、ろ、う  
「本、当、に、仲、が、い、い、の、ね、。 あ、な、た、ち、」 で、付、き、合、い、  
「彦、は、そ、う、言、う、と、さ、や、コ、の、幼、な、駆、け、で、付、た、方、向、へ  
顔、を、見、て、私、は、ま、た、言、葉、を、紡、い、だ、。

「彦、く、ん、」 あ、こ、勘、が、い、い、方、で、は、な、い、と、思、う、。 む、し、ろ、宛、  
「彦、く、ん、」 あ、こ、勘、が、い、い、方、で、は、な、い、と、思、う、。 む、し、ろ、宛、  
私、は、思、っ、た、っ、た、。 彦、は、私、は、と、り、あ、え、ず、駅、に、出、る、た、め、バ、ス、に、乗、ろ、う  
で、は、思、っ、た、っ、た、。 彦、は、私、は、と、り、あ、え、ず、駅、に、出、る、た、め、バ、ス、に、乗、ろ、う  
「僕、た、ち、？ い、わ、ゆ、る、親、友、だ、と、思、う、よ、？ 」 も、虚、を、つ、い、  
「それ、は、半、ば、彼、へ、の、復、讐、だ、っ、た、。 ち、よ、つ、と、し、た、い、本、  
、が、何、を、い、た、。 彦、は、私、は、と、り、あ、え、ず、駅、に、出、る、た、め、バ、ス、に、乗、ろ、う  
「そう、い、う、仲、崎、さ、ん、は、彦、と、は、ど、う、な、の、？ 」 お  
何、も、か、も、知、っ、て、私、は、彦、と、は、ど、う、な、の、？ 」 お  
浮、か、べ、勢、い、あ、ま、っ、私、は、彦、と、は、ど、う、な、の、？ 」 お

「彦、く、ん、」 あ、こ、勘、が、い、い、方、で、は、な、い、と、思、う、。 む、し、ろ、宛、  
「彦、く、ん、」 あ、こ、勘、が、い、い、方、で、は、な、い、と、思、う、。 む、し、ろ、宛、  
私、は、思、っ、た、っ、た、。 彦、は、私、は、と、り、あ、え、ず、駅、に、出、る、た、め、バ、ス、に、乗、ろ、う  
で、は、思、っ、た、っ、た、。 彦、は、私、は、と、り、あ、え、ず、駅、に、出、る、た、め、バ、ス、に、乗、ろ、う  
「僕、た、ち、？ い、わ、ゆ、る、親、友、だ、と、思、う、よ、？ 」 も、虚、を、つ、い、  
「それ、は、半、ば、彼、へ、の、復、讐、だ、っ、た、。 ち、よ、つ、と、し、た、い、本、  
、が、何、を、い、た、。 彦、は、私、は、と、り、あ、え、ず、駅、に、出、る、た、め、バ、ス、に、乗、ろ、う  
「そう、い、う、仲、崎、さ、ん、は、彦、と、は、ど、う、な、の、？ 」 お  
何、も、か、も、知、っ、て、私、は、彦、と、は、ど、う、な、の、？ 」 お

「サヤコは、自分はお母さんみたいなものだっ  
て仕方ない、子供みたいだ」  
「サヤコが？失礼なヤツだなあ。自分の方が、よ

あはは、と、軽く虎彦は私の言葉を笑い飛ばした  
しんせその沈黙、はみ感じ、たじろ、うて、だれ変。  
「ごめ、一き、んた、おヤ、まコ、たは、せ、一、色、々、あ、っ、て、ま、よ、っ、ち、や、べ  
。の「は、い、…、…、虎彦、もう、ん、に、返、つ、て、何、だ、か、気、か、ほ、ま、を、し、ホ、並、容、う、と、あ、る、た、に、ま、を、し、ホ、並、容、う、と、あ、る、た、に、

「は、い、…、…、虎彦、もう、ん、に、返、つ、て、何、だ、か、気、か、ほ、ま、を、し、ホ、並、容、う、と、あ、る、た、に、ま、を、し、ホ、並、容、う、と、あ、る、た、に、

は、い、…、…、虎彦、もう、ん、に、返、つ、て、何、だ、か、気、か、ほ、ま、を、し、ホ、並、容、う、と、あ、る、た、に、ま、を、し、ホ、並、容、う、と、あ、る、た、に、

家をでてから二時間ほどの時間が経過して、私達  
館に到着して、群で、何、が、驚、き、を、

「剣道の、さ、や、を、

つ係だでの同だや同て  
は関い勢もにるり子つ  
彦がな姿い人すかのあ  
虎私がなす二をわ女し  
。、けうやに顔もた少  
が九わよみ妙なにまが  
コ八うる読奇んりで話  
ヤ中思繰、もどま前会  
サ十て勘もと体あのい  
にらんなど何一く目な  
特たなう何てはな、の  
。いうよ。し人はでい  
うてろるいそ二で子わ  
ろつやすな。、ら様た  
だ知て配はたらかいな  
の、げ心くつただない  
いし上をしまつ倒わたた  
たいをとかし知面まみつ  
けな株こおてと。かかだ  
向がののもいだだどぼと  
仕ず彦ちてつとめなもあ  
には竜たしをこやにでの

「キリコ、行こ！」  
「…え、？」  
「…そう、さ、こ、な、と、こ、ろ、で、ぼ、や、ぼ、や、し、て、る、と、れ  
言、い、な、が、ら、さ、な、は、私、の、手、を、取、っ、た、。、さ、や、こ、は、勝、手、に、し、や、べ、り、始  
背、中、は、小、さ、く、な、っ、た、。、何、い、事、と、言、う、っ、た、。、り、は、ぼ、や、ぼ、れ、て  
し、る、と、言、う、ほ、ど、し、よ、う、く、な、い、歩、調、の、よ、い、け、ど、。、虎、彦、っ  
「た、っ、ち、や、ん、…、…、負、け、て、な、い、よ、？」  
の、せ、い、だ、ね、な、ん、が、ら、サ、ヤ、コ、は、勝、手、に、し、や、べ、り、始  
そ、う、し、て、歩、き、な、が、ら、サ、ヤ、コ、は、勝、手、に、し、や、べ、り、始  
ら、な、な、に、つ、は、笑、い、

「た、っ、ち、や、ん、…、…、ぶ、っ、き、ら、ぼ、う、で、て、れ、屋、さ、ん、だ、け  
手、を、引、か、れ、て、歩、き、な、が、ら、私、は、サ、ヤ、コ、の、そ、の、言、葉  
コ、は、き、っ、と、な、も、何、も、い、な、く、思、え、る、こ、と、が、好、き、な、ん、だ、と、私  
立、ち、だ、ら、う、と、何、と、い、な、く、思、え、る、こ、と、が、好、き、な、ん、だ、と、私  
「サ、ヤ、コ、…、…、童、彦、く、ん、の、こ、と、好、き、な、の、？」  
い、つ、か、私、の、足、は、う、ま、く、歩、け、ず、に、少、し、ひ、き、ず、ら、れ  
を、サ、ヤ、コ、に、訪、ね、て、私、は、ど、う、し、て、か、そ、の、こ、と、に  
立、ち、止、ま、り、振、り、返、る、と、ふ、に、や、と、で、も、言、う、よ  
っ、た、。

「た、っ、ち、や、ん、す、ご、く、い、い、人、よ、？、キ、リ、コ、も、き、っ、と、  
「…、…、そ、う、じ、や、な、く、て、」  
見、当、違、い、も、は、な、は、だ、し、い、サ、ヤ、コ、の、言、葉、に、私、は、辟  
ん、ど、無、視、し、て、サ、ヤ、コ、は、そ、の、場、で、ほ、ん、の、少、し、表  
「た、っ、ち、や、ん、…、…、好、き、な、人、が、い、る、ん、だ、っ、て、。、それ  
」

ペ、ろ、り、と、サ、ヤ、コ、は、小、さ、く、舌、を、出、し、た、。、え、と、私  
つ、か、ん、だ、ま、ま、の、サ、ヤ、コ、は、そ、の、場、か、ら、歩、き、出、し、た、い  
く、ら、い、の、歩、調、で、私、た、ち、は、手、を、つ、つ、な、い、だ、ま、ま、歩、い  
「去、年、の、五、月、く、ら、い、に、…、…、言、っ、て、み、た、の、。、好、き、  
て、。、私、の、こ、と、は、友、達、と、し、か、思、っ、て、な、い、。、っ、て、。、そ  
」

歩、き、な、が、ら、サ、ヤ、コ、は、振、り、返、っ、た、。、困、っ、た、よ、う、な  
全、く、違、っ、て、い、て、け、れ、ど、何、だ、か、と、て、も、き、れ、い、で、  
ま、り、い、な、い、ん、じ、や、な、い、か、と、私、に、は、思、え、た、。、サ、ヤ、コ  
け、た、。

「そ、れ、っ、て、…、…、き、っ、と、キ、リ、コ、の、こ、と、だ、と、思、う、」  
「…、…、ど、う、し、っ、て、ち、や、ん、は、入、学、式、の、日、に、ね、」  
「だ、い、っ、か、け、て、サ、ヤ、コ、は、入、学、す、く、す、と、笑、っ、た、。、私、は、



てくるのをしはばらぐ待っていた。そう言うたの。すご  
「キリコに学会つた、って、そう言うたの。すご  
「そう。入った、って、そう言うたの。すご  
「その時、ごとき、わかんない、って、そう言うたの。すご  
「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に  
「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に  
「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に

手を引か、れ、て、走、り、な、が、ら、私、は、ま、た、こ、の、全、て、が  
「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に  
「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に  
「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に

「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に  
「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に  
「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に

「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に  
「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に  
「さ、か、の、れ、の、どう、が、お、か、し、い、だ、き、な、か、考、え、に、の、い、し、弟、サ、と、る、変、隅、っ、に

「私の友達。いきりこなっ普通で言通り」のサヤコが言っ  
何の気もなし、少しく波をサヤコに問うかとい  
見せて、出た。ちやそなりとだに虎彦たやとの私がとごや、めつ、幼んなく稚なく園さるもいと、いね、っ、ごしお婦よば人は  
「自分、今日は答つりわわえきのずぎと席に睨み、変はしらり返  
今短。とも言わねえ。たそが。彦そか振ら、返

「仲崎さん、顔、こつわもいりよな？」  
「… … どのか、虎彦にわ  
とぼけな、だろ中け  
私因いっる、けにうだ晩わ  
とぼけな、だろ中け  
虎彦はあ、か、わら、ず、目、審さ人  
剣道れサそつた。試姿に  
か、の、なてけとぼけ、今数婦が  
、今どをの、で、は、ちの、が、え  
し。は、応、あ、が、で、は、ち、の、が、え  
返たん反と顔で、は、ち、の、が、え  
いっさなっな顔、今数婦が  
問思母んきん、け、た、し、の、ろ  
にを、おど、そ、け、た、し、の、ろ  
私由の、て、ぼ、け、た、し、の、ろ  
と理、彼、ら、い、れ、と、ぼ、け、た、し、の、ろ  
の、な、て、け、と、ぼ、け、た、し、の、ろ  
、何、戦、た、つ、知、で、ら、ず、と、と、て、男  
、の、つ、知、は、あ、か、わ、ら、ず、と、と、て、男  
で、き、知、が、と、い、か、わ、ら、ず、と、と、て、男  
顔、つ、と、ち、こ、な、い、か、わ、ら、ず、と、と、て、男  
さ、ど、い、か、け、が、何、が、慄、ら、た、つ、な、ら、ず、と、と、て、男  
崎、… … どのか、虎彦にわ  
仲、… … どのか、虎彦にわ  
「… … どのか、虎彦にわ

「次の試合に勝つとベスト4で、もう二つ勝った  
虎彦が、ちよりのご婦人、竜彦のお母さんが黙っ  
「な、あ、に、幸彦パパ、まだたらっちゃんとなっカ？  
「そう、な、の、よ、お父さんたら。今朝になっも  
い、わ、」  
サヤコは本当に親しげに竜彦たちのお父さんを幸  
も、そのこ、と、ま、ね、で、と、構、っ、て、い、く、さ、う、に、言、っ、た、。、私  
は、黙、っ、つ、て、続、く、や、り、を、聞、き、い、た、。、その  
「ね、え、ち、っ、ち、や、ん、何、し、た、の、？、幸彦パパをこんな  
「ぶ、っ、ち、や、け、の、朝、帰、り、よ、ま、り、に、ぶ、っ、ち、や、け、す、ぎ、て、い  
ご婦人の言葉はあまりにぶっちやけすぎでい  
ヤコも当然驚いた様子で、すっ、と、ん、き、よ、う、な、声、で  
「朝、帰、り、い、さ、ん、だ、っ、ち、や、ん、が、あ、あ、？」  
「… … 母さんだっ、怒、っ、た、じ、ゃ、な、い、か、。、連、絡  
。、挙、げ、句、に、け、が、ま、で、… …」  
そこ、に、座、っ、て、い、た、明、ら、か、に、そ、の、双、子、の、父、親、と、い、う  
し、た、。、け、れ、ど、お、母、さ、ん、は、聞、く、耳、を、持、た、な、い、と、い、い  
「それ、は、そ、れ、も、う、す、ん、だ、こ、と、で、す。、男、の、子、だ、も  
す、だ、ろ、う、し、。、そ、れ、に、竜、彦、も、虎、彦、も、信、用、で、き、な、い  
私は、そのや、り、と、り、を、聞、き、な、が、ら、内、心、び、く、び、く、し  
っ、て、無、断、外、泊、の、上、朝、帰、り、を、し、あ、い、ろ、の、家、で、何、事、も、な、い、帰、瞬  
し、と、私、に、と、竜、彦、の、間、に、泊、し、だ、い、し、う、ま、し、い、ろ、の、家、で、何、事、も、な、い、帰、瞬





、んさの去にさ父そをう母おは場よお々私のるの時、そす前。てと、勢松たつんて加、い合さしにてが父そ彦うし目お。虎よにもてた折るうとつれ時めよ彦言ら、だる竜とけてな守に、向めを見とらにが人らごか私な三か後すにをるろの回急子いこそをが様でと、車顔のれたてがの

「彦…んは唐りしつ、し、に、だよ！」来てくれたのよ？」をひいた。いながら、二人につめよられる竜彦を見ていた。「は彦が…さよらに、めよる。偶然彦は困さつんたがこここで来ら。その態度が気になり、えらな『ちんうわが』はなが…じら虎彦はさうてるわ儀。「何怒つ別の口、か、うで私コもはに、あ今付、こつ、そでたの何だ、三がけ、をるの、ことだ。ちも知ら彦向さに。

「ヒ人マはだ三ったとかもら、来わただか、の間のしあ、けにとられていやりうた。わ、ぎ、わい、卑、さしく、凡よこて。つ、来でうに戻助た。

「少、下、卑、た、声、の、お、礼、に、私、は、い、つ、も、の、声、で、返、に、顔、る、ろ、め、一、と、ゲ、し、言、た、め、だ、が、に、を、弟、出、し、始、ん、な、海、車、兄、を、の、り、し、る、を、の、顔、の、ん、教、て、様、か、が、彦、ん、の、彦、う、説、し、の、だ、や、虎、さ、彦、は、で、を、人、何、と、母、彦、お、た、彦、何、三、た、彦、お、た、彦、態、な、たい、竜、ら、つ、ら、い、う、和、つ、て、か、だ、が、ぼ、ろ、平、だ、つ、て、窓、う、な、つ、だ、も、景、立、き、の、よ、き、供、ん、て、光、だ、て、席、の、聞、子、た、と、な、た、つ、手、。

「そ、の、彦、言、い、二、を、笑、わ、つ、な、て、い、私、

「… … おい、虎彦」

「ん、何？」  
先ほどと変わらない不機嫌な顔で虎彦を呼び、突引張つて私たちから少し離れた。ひきずられるにげんこつを食らわされていた。痛いなあ、何す後、虎彦は竜彦に財布を巻き上げられた。

「ちよつと！それ僕のサイフ！」

「うるせえ！大した額が入ってるわけじゃねーん  
何事が起こってるのかわからないまま、私はそは私のとなりで笑っていた。何だかとても楽しそ  
そんなサヤコを少し睨んだ。

「竜彦は本当に、あの子と帰るのか？」

「さあ？竜彦、虎彦！どうするの、乗らないの？  
車の中から松前の両親の話す声が聞こえた。サヤ

うな笑みを浮かべると無言のままそのワッポック  
んでいっただ。竜彦にひきずられたいつた虎彦は、や  
私の目の前。揺も困惑も少し、どいなかっ。こなう、な  
は、い。何だかになっ。やっ。もい、とか、少し投  
そんな感じになっ。やっ。もい、とか、少し投

虎彦は荷物をかついで車に乗り込み、お待たせ、  
。中ではまた何やら会話があって、お母さんが外  
「竜彦… …キリコちゃんと帰るの？」

「おう」

ぶつきらぼうに、竜彦はそれだけ答えた。私がそ  
はそこに立っていた。それから今度は彼のお父さ

「竜彦… …彼女か？」

もうどうでもいい、投げやりだったはずの私は、  
竜彦はさも面倒そうに息をつく、私をにらむよ  
えた。

「そうだよ」

竜彦は、何だよ、とでも言うようにじっと私を見  
窓から、中での会話がほんの少し聞こえた。何や  
サヤコのはしゃぐ声がした。

「遅くならないように、気をつけるのよ」

最後にお母さんが竜彦にそう言って、奇妙な騒ぎ  
ら走り出した。私は、強ばった心臓がゆっくりと  
に立っている竜彦を何も言わずに見ていた。竜彦

「… …何、ぼーとっ立ってんだよ？」

「え？」

「え、じゃねえよ。行くぞ」  
竜彦はそう言っあごをしゃくった。そのまま歩  
に続いた。

眩しい西日が、大きな体育館をななめ上から黄色、その体育館の前庭、などいうか大きな公園になつて、には、竜彦と同じ大、会に出た高生や、この、も、私たちとはその中で特に浮いて高いなければ、な

体育館から少し離れた場所まで来て竜彦は足を止、彼はまたあごをしやくつた。私に、座れとうなの、立ち止まり、あて、何故かそつた。ることも、何か別の、うんざりした、よ、うれ、たよ、な、め、息を吐き、それから、あ、き、れ、た、よ、う、に、私、に、言、つ、た、。

「座んねえの？」

「え？」

「座れよ」

言われて、私は何も答えず、竜彦の腰掛けたベン、な格好になつて、それから竜彦が言った。

「何しに来たんだ？おまえ」

「別に…サヤコに、誘われて…」

「ふーん…」

竜彦は私を見ようとしなかつた。私も、彼を見な、なつた私は、何とか言葉を紡ごうと、口を開いた

「サヤコが…ヒマだつたらつきあえ、って言っ

「よっぽどヒマだつたんだな、じゃあ」

竜彦の、面倒そうないつもの声がして、私はそち、ても、開き直つてもいられず、私は彼を少しにら、い声で言つた。

「…悪かつたな」

「悪いって…何が？」

私はすぐに自分の視線を足下に落とす。彼を見、の「そうだよ」という答えが、私をひどく混乱さ、か、うーとか、小さく言つて、それから困り切つ、い

「どうせ…虎彦のヤツが仕組んだんだろ。った、ぶつぶつと、竜彦はそんなふうに言つた。私は横、聞いていた。

「こないだ屋上で鉢合わせから、縹と二人して、き」

心底いまいまし、そうに竜彦は言つた。私は何も答、。竜彦はけだるそうに、あーあ、と息をつき、そ、私を見た。私はそんな彼を見返して、何とか言葉

「残念だつたわね」

「何が？」

「最後の試合」

竜彦は私の言葉に目を丸くさせた。それから顔を、で大きく伸びをして、その顔を空に向けた。

「まあな。大番狂わせだよ、本当に」

「でも…大県で四位なんだ、から…やるじゃない

「普段あんなとこにいたないよ、顔があつたもん

いじ悪く、竜彦が笑つた。私はそのいじ悪さが自分、た。にやにやと、竜彦は笑い、それを見て私は言つ

「私のせいで、言いたいわけ？」

「俺はどっかの誰かと違つて、作りがデリケート

「何よ、それ」

ケケケ、と下卑た声を立てて、竜彦が笑つた。私は

機嫌丸出しの私を見て、竜彦はさらに笑った。それで  
「ばーか、おまえが見に来たくらいで負けるわけ  
ったのと、俺の力不足だよ。マジにとるな」  
竜彦はさも楽しそうに笑った。私が笑われている  
のまま、私はそんな竜彦を見ていた。竜彦はしば  
た。  
「ありがとな」  
「……何よ、急に」  
「一応、礼でも言っとうかと思っさ。おもしろ  
軽快に、竜彦がまた笑った。わけがわからずにい  
なことを言った。  
「すんげえ顔してたぞ、おまえ。勝ったときも負  
」  
その顔が本当に楽しそうで、ということは私がそ  
た私はその場でかちんと来てしまった。同時に、さ  
ったから入ってしまいたいような、そんな気分にさ  
らたく複雑な顔をしてみよう、私をずっと見てい  
、からかい口調で話し始めた。  
「に、しても、今日は本当にヌケてるな、おまえ  
挙げ句に俺の彼女にされて」  
「それは、あんたが勝手に……」  
「ま、そうでも言わなきゃうちの親もあの馬鹿二  
いか」  
「私は……サヤコの友達で、それでついてきただけ  
竜彦に言われたい放題なのがしゃくで、私は何と  
いた。竜彦はしてやったり、という顔で、本当に  
いた意地悪く何度も笑い、私をからかい、それからそ  
「本当……サンキュ、な」  
「……何が？」  
「何っつう……そりゃあ……」  
「そう言っとうと、竜彦は突然その態度と言っ表情を  
悪いような顔になりつて、竜彦は言葉を探して、つ  
「だかから……ありがたから、そう言ってるんだ  
「だかから……何がよ」  
「何っつう……だかから、今日のこただよ。ひっくる  
ぶすつと、ふてくされた顔で竜彦は言い、私  
驚いて何も言えなかつた。それからまた、私たち  
暑い。ろ流れる風が吹く。わたり、重たは、そ  
だいまら空を見たら、私を見たら、私を見たら、私  
「なあ」  
「……何」  
「あの後……大丈夫だったのか？」  
「あの後……？」  
「あほらしく、こすい、低い声で竜彦が私に尋ねてきた  
と彼とをばかにするよ、少し笑った。  
「あ、あの時ね……特別困ったことにはなっ  
「なら……いいけど……」  
「ふふん、と鼻先でこたさ、大きく笑うと、竜彦は  
いるとき、いやみで鼻持ちならぬ私になっ  
していつものように、彼をばかにするよな言葉  
「何？あんたそんなこと気にしてたの？自分のこ



だ不いかまみ  
なうめは「ず」  
…言しか後私稽だっ  
…とかの？滑稽だっ  
は何をしあけも滑稽  
方はをわめても滑稽  
いの眉…ぬとて滑稽  
言そははし死」、と  
う彦た。たで…は、  
う。彦た。たみ…彦  
いた。彦た。たみ…彦  
うめ。彦た。たみ…彦  
そかた言だずあ彦  
、しせと変はやす  
えをみすかのりか  
ま眉て出何何そ動  
おにっつきえ…を  
…骨笑吐ま…口  
…露でをおみてと  
ては先息のずのも  
っ彦鼻めあは何ご  
「彦、くた」「も

彦向だなでに度  
龍を分み、か何。  
。ら性やらばもた  
たちるいし小度つ  
っこえてか。何言  
かが言ね損しはう  
な線かば。い彦こ  
き視とついな彦で  
でる、つなれ。り  
ももい。せ知た振  
何こさたわもっ口  
にえなつ表か思た  
かさなかをいをれ  
ほりめなど悪と疲  
う怒ごはこがこら  
笑。てでる味なか  
はたけ間い飲んで  
にしか人て、そつ  
私く配うじらでき  
、悪心い感たかき  
てを、うをつこ吐  
「彦、くた」「も

でかい始うてくし私うもはこゆ  
どばなながよくてを、言。私たつ  
ほ。れら校じずっ手らとたとれど  
うたきだ学同ま会相がえいうさな  
言っくりくりで気とのなびで思らと  
とだや、き上、私私いおんう知こ  
る腐といた屋も、思、拒そいの  
め陳いなれたともて。やを。思私  
つもなの別まれにしかいかてな  
見にい方に。その後をう。そうしん  
、りて仕りう。た顔をた、ろ覚そ。  
をまっも帰ろかつなだいてだ自はた  
顔あ思て朝だうあやのづえのか彦い  
横、うえのたろがいきびいつ童て  
のでそ考あせだと、なにおない。め  
彼ちもら。わたこてれとはき。たが  
ながでがら合ねなれ現こ私でたつな  
んり、なたを重んさはるにりっだを  
そあど見っ顔をありにいとたな覚く  
は、けをかと体はた所てこしに感遠  
私てう彼な彼、彦当場えの話分なで  
ん違、来にに彦つのびそに気ん目

私感私うっにい。けたて、反  
を、よか分いばるさしれをの  
のらるな自なればはをき分身  
るたすははかけら体吸あ自自  
なれもで私んない事呼にで分  
くまでのとなわでの深分分自  
痛拒攣も、と語り悪か自自は  
とし瘉いてこ、通最度で。私  
りも、いいいだで、幾分た、  
く。がわ着恐んまどで自つて  
がろ辺な落何い。け場、し思  
胸だのん、ぼるいこの悲と  
のる胸そてばれなそろに、  
分すた、いれけられはだ変な  
自をっど着いないし私んかう  
、顔なれちでも、ただろ  
てなくけ落いにまかてえ何だ  
っん痛う。な口まいっ考、ん  
思どと言いわ。じな思に  
うはうは痛言た同えう急せえ  
そ彼思人が、つとらそをく見  
「彦、くた」「も



私です。いつもこの態度で、私は竜彦を自由にさせてやらせてあげました。

「いいわよ、もう」  
「……何が？」  
「無理は私にのせて、葉やえる唯一つを言っただけでいいよ。かわらなくていいよ。愛してよ。かわらなくていいよ。愛してよ。」

かきあげた。それは、唐突な別離の宣言に驚いていらすが、わかからず困っている、という顔で、少しいら「だから……もう屋上に上がってこなくていいっ

楽でしよ？無理矢理私の相手しなくてすむんだか竜彦はその言葉で、また少しその顔つきを変えたい感じだ。そして、何だか素直でない顔で「……バカキリコ、正気か？」  
「バカキリコ、正気か？」  
「嘘吐け……いおまえが正気か？」

あはは、と、乾いた声で竜彦が笑った。こいつ何そんな彼を、笑いもせずに見ていた。乾いた竜彦のそいくの、私はその時じっと見ていた。

何だか奇妙だった。ああせいせいした、とでも言ていた。私は、その予感が外れたいところが意外だ。たまたま、こつてほしく男はでほし。かっつて、私は彼の反応を待

し。しばらく、私たちはそこでお互いを見ている。見彦を、竜彦は私を見ている。誰？」  
「竜彦の……好きなら、誰？」  
「気がつくよ。私の目には、彼以外の何も入っていない。この切り替わりは何？と思いつながら、そ

「何だよ……いきなり」  
「答えが途中でいよ……開放して、やるんだから」  
「言葉があるよ。何の気にも思っただけで、それを出す。中な、私はい度も彼に訪ねた。

「竜彦の好きな人って……」  
「おまえにそういって聞かれないでねえ」  
「おまえは怒った顔で、こちらを見ないで言っ

と納得しなげ、それでもいつものいやみな態度「誰よ？教えなさいよ？減るもんじゃなし」  
「誰よ？……性悪女」  
「竜彦はそう言っただけで毒突いた。私はその言葉に少した。竜彦は不機嫌な顔のまま私を一瞥し、ふんを立ってひと、私にはまたけたけたと笑った。

「何笑ってんだより？おまえ」  
「何って……そりゃ…」  
あんなにかおかしからよ、とか、その通りだと思んあった。でも私は言わずに、ただ声を立てて笑

は通くし以顔思ま  
男もておれのをは  
のつふとその他と彼  
こいでい、とこ、  
、て嫌にでついま  
でし機当さもなま  
りそ不本しがらの  
た。はお男だそ  
ったた私とのく、  
びっせ、いこかて  
にだわをる、とく  
私い思男じで、な  
にらにの感中なは  
さく私そののか配  
まなどい手心い気  
は議うな相じしる  
の思ろしに同惜え  
う不だかきかり答  
いかるしとうぱに  
とのき顔をいっけ  
、たで笑いとやか  
女っうなて、はい  
「… … い い 加 減 、 帰 る ぞ 、 俺 は 』  
私 は そ の 言 葉 を 聞 い て 笑 う の を や め た 。 太 陽 は す  
ず ぶ  
い ぶ ん 角 度 を 変 え て し ま っ て い っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
や て 、 い 深 呼 吸 を し た 。 の ま り に も 好 自 然 に 口 か ら こ ぼ れ て 、  
一 つ 深 呼 吸 を し た 。 の ま り に も 好 自 然 に 口 か ら こ ぼ れ て 、  
「 私 … … 竜 彦 の こ り と 、 好 自 然 に 口 か ら こ ぼ れ て 、  
そ の 言 葉 は 子 気 た 似 ち な 目 に い な っ た 。 あ り 竜 彦 は  
こ ぼ れ な 変 言 子 気 た 似 ち な 目 に い な っ た 。 あ り 竜 彦 は  
「 私 … … 竜 彦 の 、 こ り と … … 」  
そ れ は 自 分 で 確 か め る た め に 口 に し た よ う な 言 葉  
い 、 私 は ひ ど り く 混 乱 し た 。 声 が 出 て こ な い 。 喉 が た っ  
。 笑 っ て 振 返 っ た 。 本 当 は 、 見 笑 っ て 出 た な ど 驚 け ぬ  
「 仲 崎 … … 」  
「 … … 帰 る ん で し ょ ？ 」  
そ う 言 っ た 声 に 涙 が 絡 み つ い て い て 、 そ れ で 私 は  
ぼ ろ ろ と 涙 が こ ぼ れ て 、 あ と い っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
い ら っ  
す ば び っ  
き の いた 。  
「 俺 の ほ う が よ っ ぽ ど 泣 き て え 気 分 な ん だ ぞ 。 わ  
「 … … わ か ぐ ず や り な が ら 、 私 は 首 を 横 に 振 っ た 。  
鼻 を く ず ぐ ず や り な が ら 、 私 は 首 を 横 に 振 っ た 。  
ま 、 低 い 声 で こ う 言 っ た 。  
「 人 の 気 持 ち も 考 え な い で … … お ま え 本 当 に 、 サ  
手 を 捕 ま れ 、 竜 彦 は 私 を ベ ン チ か ら 引 き 上 げ た 。  
い と 強 く 引 っ 張 っ て 、 駆 け る よ り も ほ ん の 少 し 遅  
乱 暴 に 歩 き 始 め た 。  
ど こ を ど う 歩 い た の か わ か ら ない う ち に 、 私 は 河  
り きた い で は な い 、 コ ン ク リ ー ト で 川 底 を 固 め ら  
し っ  
た う な 事 かん な 尋 ね る ン こ と は 遠 く 川 底 に 私 は い 彼  
誰 に 対 し て も 怒 鳴 り 返 す よ う な 、 そ ん な 気 配 が た  
「 … … 竜 彦 」  
「 お ま え 何 考 え て ん だ よ 、 ば か だ ろ ？ っ て い う か  
川 向 か っ て 竜 彦 は 叫 んだ 。 あ ぜ ん と 、 と 言 う よ  
に な っ た 竜 彦 の 様 子 を 見 て い る だ け だ っ た 。  
「 何 が し た い ん だ か わ か ん ね ー け ど 、 そ ん な し お  
だ と か 、 思 わ ね ー の か よ ？ 」











「おすまくえはあの竜後彦… …どいうしてるた？」の顔を見上げ  
つた。「あんた、公認になってるわよ」  
「お彦は公認の一言、一度連れ込んできなさい、って」顔で  
。しばらく、私たちは無言で動かなかった。けれ  
「… …何だよ、それ」  
「何が言おうと、それいっ。あんなことがあったんだ  
そしこう尋ねた。わぼを向いたまま、竜彦は困った  
「竜彦は… …いやなの？」  
「え？」として竜彦が振り返る。私は黙って、その  
仕方ないし、でも、いやだといわれたら、どうな  
ままさつぽを向いて、小さく言った。  
「いやじゃ… …ないけど… …」  
「じゃ、うちに来る？」  
「いや… …それで… …ちよっと… …」  
ひどく混乱している竜彦を見て、私は首を傾げたい  
のに、家族に紹介されるのがどうしていやなの  
みた。  
「何かやま… …いやま… …し… …とこ… …ろ… …でも、あ… …るの？」  
「やまた彦はまた彼に尋ねる。何か恥ずかし  
つた私は、先に全部して、おまへなあ！」  
「さう、先に全部しやない」以上ないくらいに想  
「何彦は、私と両想いで、これ以上ないくらいに想  
関し、は相変わらずかたくなだつた。きつと古い  
やいな。結婚私題はもだ。それかその顔は」  
「… …お返し、よ。も、竜彦は何も言わなかった。し  
し笑った。そして今度は逆に、私が質問した。  
「彦彦のうちはどう？って、あんとここは別に  
「… …やめてくれよ」眉をひどくしかめた。そして  
した。  
「相変わらず女みしたいにぴーちくばーちくだし、  
。母親が二人いるみたく、うぜえっ一の」  
「ふーん… …そんなもんなんだ」  
そう言う私のは彼の顔を見上げた。ぶつぶつと、  
ぱーちくうさ… …弟のこ… …や… …い… …し… …よ… …にな… …う  
である彼の母さん、その… …など、をぐち… …つ… …て… …いた。  
態度で相槌を打つたり、時には彼に反論したりし  
いまだかつかない、平和と言うか退屈な昼休みは  
った。いつかはあんなに激しく、痛めつけ合おうよ  
と、それやすはっぴり少な激しく、痛めつけ合おうよ  
は、少しやすぎだっ、激しく、痛めつけ合おうよ  
「なあ仲崎」

「… … 何？」  
「おまうで、もかいなんどこし人に見られたら、どうする  
「おどい、やだにかうつ伏せにうなり、その上で腕を組むよう  
彼の膝にうな竜彦の顔があつて、私はさらに言い返した  
「またがれのて方がまだまし？」

「… … ああの上で」  
私は顔を上げて、ついでにそこに起き上がった。  
格好になると、竜彦はため息をついてその頭をか

「… … 何、そのため息」  
「別に。おまえ最近ちよつと変わったよな？」

「そう？」  
そう返して、私はそろそろと移動した。竜彦の、  
の前にその顔が来ると彼はようやく私に乗られて  
いた。

「おっ… … おい仲崎！」

「何？」

「何？つて… … そりゃ、俺の科白っ… …」

「たまには、スキらくらいしたい」

そう言つて私は竜彦の顔を捕まえた。私は本当の

だ少し、竜彦のことを考へる頻度が高くなつた。は  
人間も、士あたるんだ、どうでも言ふのり愛して自し。怒  
くなら久し。ぶ腕で私を押しやり、顔を背けて少し。怒鳴  
彦はそ腕で私を押しやり、顔を背けて少し。怒鳴

「何考へてんだ、おまえは！」

「二期始まつてから一回もしてないでしょ。キ  
？」

「… … ばかキリコ」

ち、と竜彦は短く舌打ちした。そして、眉を釣りに  
こう言つた。

「そんなにしたきゃ、そ一ゆ一相手作つて、そい

「イヤ、絶対にイヤ。あんたとでなきや昼日中、  
あんたは私が他の男と寝ても、平気なの？」

竜彦は黙つて私をにらんでいた。私は少し笑つて

。

私はやっぱり変わつていないらしい。いらいらす

かに少なくなつて、ここで以前のように彼に八つ  
やっぱり欲張りで自分勝手、とてわがままだ

、遠回しにせがんだりもする。ばかキリコ、と、  
に、そつぽを向いて低く言つた。

「いいわけねえだろ… … この、性悪女」

「だつたらあんなが私の相手をしなきゃならない  
いの？そつちこそばかなんじやないの？」

言つてほしい言葉を耳にすると、今度はまた別の  
でもあつたほうがうれしい、なんて程度だつたこ

を考へるだけでも実は結構楽しいのだけれど、や  
うしないではいられない。と、言つても結局、それ

かわいいレベルではないだろうか？

「仲崎っ… … やめろっ」

「やめない。大体あんた最近、偉そうなのよ。女  
狗になつてれば可愛げもあるのに、そうでもない

てるのに、自分かわりもしないなんて」

「さわ… … さわるつて、なあ… …」

「私に飽きたんだったらそう言えよ？他の子と他  
手だったらそういう気になる？それとも、やっば  
言い終わらないうちに、竜彦が私の腕をつかんで  
間もないまま、唇は音もなかつた。やけくそに  
はしがき嫌に、不意に目を閉じた。それで、ま彼  
の肩に  
を少し離して、本竜彦は言った。

「おまえ…さいっきカレーパン食ってたよな？」  
「何よ…悪い？」

問われて、返して、私は声を立てて笑い出した。  
の声を聞かずに、ええも。今度は抱きかか  
の間、怒りや、だ、これ、胸だ、と  
し、顔、額、と  
つじくはと  
だ、彦、と  
ね、少、胸、な  
後、う、た、ん  
の、も、そ、る  
か、き、し、ら、い、り  
パ、た、ら、な、た、で、き  
ン、の、も、そ、つ、る  
。、。か、き  
ル、し、か、な、向、た、り  
は、抱、く、ぼ、さ、れ  
は、抱、く、ぼ、さ、れ  
今、一、き、れ、そ、満、ち  
う、突、う、て、分、  
る、も、を、て、つ、分、  
え、を、私、く、言、十、分、  
こ、男、を、し、た、も、十、分、  
聞、な、つ、楽、ま、で、  
聞、な、つ、楽、ま、で、  
が、怒、が、と、け、

「午、後、か、ら、サ、ボ、っ、て、…、…、ど、っ、か、で、し、よ、う、か、？、い、っ  
「ば、か、ん、で、言、つ、た、ボ、て、ま、に、は、ね、い、い、じ、…、な、こ、い、の、あ、性、た、し、た、ち  
「し、く、な、い、わ、よ、？、」

「…、…、そ、う、い、う、問、題、じ、や、ね、一、だ、ろ、な、」が、ら、私、は、く、す  
ち、と、竜、彦、が、舌、打、ち、し、た、。一、聞、だ、き、ろ、な、」が、ら、私、は、く、す